

昭和十一年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一冊二日發行）
昭和十一年七月廿日印刷納本 昭和十二年八月一日發行

第二卷 第八號

正淨

八月號



法然上人鑽仰會發行

新刊

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ボバラルビ付
美麗クロース装
定價 六十四錢
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、御二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 社友の隣 所行發 ◇

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 送料 共 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我々が祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩贊の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡山上人との接觸。第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇



◇ 浄土 第二卷 第八號 八月號 目次 ◇

・表紙……………當麻曼陀羅

・扉・目次カット……………鈴木金平

法然上人の
後裔に聞く
本當に求むべき宗教……………立石鉦一(一)

名僧物がたり

明惠上人の感化……………赤木健(二)

經ヶ島由來記……………村上博了(三)

手越の里の白拍子……………山田顯達(四)

話說 伸びる日、縮む日(芝園雜話)……………眞野正順(五)

平家物語 鬼界ヶ島……………畑四郎(六)

猿を求め
山の實語
山での宿命……………富山雅夫(七)

信仰 仰相談……………中村辨康(八)

小説 死亡通知……………角田寛二(九)



信仰實話 二十九年の大精進

爪生天全 (四三)

仙人せんじんから生うれた

佐藤春夫 (四六)

王子おうじの話はなし

(青柳喜兵衛)

漫畫まんがガンバリガンチャン

野田 信 (五二)

時代小説

果心居士

(中島松二)

下村悦夫 (五八)

感。もつたいたない話 (三)

歌壇 與謝野晶子選 (四四)

話集 心の癪 (四四)

天台山巡拜の記 野口周善 (五五)

川柳と夏の景物 代田重雄 (六〇)

家庭醫學 肋膜炎後をどうするか (醫學博士 小池 重 (六〇))

法然上人 法語新釋 亂るゝこゝろ

中村辨康 (六四)

編輯後記 (七二)

信仰讀本

改增
訂
版補

錢二十二 定價 共料送 頁〇八版六四 付名假りふ總 著 康 辨 村 中

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷夢から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を開く。『淨土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾七錢
學教授 法然上人に關する文獻は古來少しとした
かつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚
に失するが、萬人に適する文字を得な
かつた恨みがある。篤學の著者が研磨して
ものしたるこの簡潔にして要を得たる一本
は讀者をして直接上人に接するの思ひあら
しめ、その端々たる餘韻は讀む者を法悦の
彼方にひき込ますにはおかない。

◆ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◆

淨土

八月號

人の命は食事の時

むせて死することもあるなり

南無阿彌陀佛とかみて

南無阿彌陀佛とのみ入べきなり

法然上人法語抄二七一



本當に求むべき宗教

立 石 鉦 一



かない、そして世間は、その精神に尾端をつけて別體の如くこれを造りなして、人に教へ、之れに導びきたがるものである。それが迂余曲折を経ないで、或る中心人物の獨斷とその押しで以て、急速に出來たもの程その傳播

ものがその態をなすには、やはり並大抵の變遷なしには、置かない。よしその中心的精神は昔よりあるものにせよ、やはりそう、樂には行

力は偉大であり、知らぬ間に相當の勢力を作るものである。そして相當な狂信的な信者を叫合して一つの宗教團體らしい運動を世間的に認めしめるようになるのである。元來宗教は一人一宗とまでも云はれる程、主觀的度合の濃淡によりて異なる。然しその主觀的度合の淡い者多き世間にありては、その度合の強きは、その淡きを集める。頂度習字を教はるにも、癖のある教師について習ふ程或る意味の上達は早きが如くである。だが、此くて習ひ得た字は、うまくなればなる程、自分には満足出來なく、何となしに自分の文字が所謂鼻についてと云つた感じで満足出來ないものである。そして、次第に大家の書にひかれて行くようになり、もとの手本に何等興味を持たなくなる。昨今、色々と新しく、考へ出された宗教團體と

も修養團體ともつかぬものが、一時非常な速度で、ひろがつて行くようである。そしてそのいづれもが、何かの舊來の宗教のどこかの部分の寄木細工的考へ方なり、信仰を造りなしてゐる。それだけ、どの種の考へ方をしてゐる者にも、どこかの點がアビールする。世間は何か己れ以外の力を求め餓えてゐる以上、心琴にふれるものがある。だから一層の速かさで、之れに己れの精神的力を求めんとするに到るのである。

此く世間で求めなやんでゐるものは、今に始まつたこれ等のこねあげの類似宗教では、到底、満足され得べくもないのであつて歸るべきところは、古き教であるのである。古き教古きが故にのみ、尊きには非ず、古き教には、力を盡し、之を齟齬した人があつて之等を我々生きた生活に生活してくれ且教をたれてくれたが故に、盡きざる力を同じ思ひの許に持ち得るが爲である。法然上人の如き正にこの人であつて古き支那印度の教を大和魂を持つ、我々の爲めに、所謂しほりなほしをしてくれた人であると思ふ。力は己れにあるに非ず、名號稱へるにより、他の力は己れに加はり、思はざる効果が現はれるのである。力はこゝにあり、彼處にありと指示し得るも

のに非ず、唯他に任せ、念佛申すによりて、己れの内に加はり在るものなるを教へられたかに思ふ。力はエツキスであつて、理論でも議論でも、ないのである。この力を加へる宗教のみが、まことの宗教であつて尤も永く續くべき宗教である。

この力が、この「淨土」なる小誌によりて、更にひろめられようとしてゐるのである。備中連島に法塔寺と云ふ寺がある。こゝに寂嚴といふ字の上手なお坊さんがあつた。この人は國內名家のお手本は、勿論支那大家の拓本により習字に習字を重ねたるも、ついぞ満足したことがなかつた。ある時、毎日手習ひにやつて來る小供達の、字を見て、はたと思ひつき、その小供達の、なつてない字を習ひ始め、遂に自分の満足する字を書き出し得たと云ふ話を聞いたことがある。そしてその書かれた文字たるや、實に洒脫な立派なものである。

これと同じように佛教の専門的知識の方々により、古き教へが、新しき表現により、教へらるゝよう、そしてこの「淨土」が、その、尤も良き發表機關であり、自分如き、俗人にとりて、古き教が、新しき言葉に於て教へらるゝようになれば、幸此上なきことと思ふ。

名僧物語

明恵上人の感化 赤木 健
經ヶ島由來記 村上 博了

明恵上人の感化

……北條泰時と上人の話……

赤 木 健

人間教養の道程には、家庭の感化とか胎教とかいふもの意外に、何かあるのではないかと思はせる事である。

北條泰時の立派な政治と人格とが、明恵上人の感化によつて造られたといつてもよい位、後代の足利尊氏や徳川家康に見るやうな複雑な心とは正反對の、淳厚な、眞直な、強い心をもつてゐたと思はれる泰時のやうな人に對する高潔な聖者の感化は、思ひの外に大きなものであつたらう。

此の眞直な心といふ事は、北條氏全體を通じて

云はれる事ではあるまいか。時政、義時のやうな陰險で權謀術數のみを弄したと思はれて居る人々でも、それをするには、むきになり、一生懸命になり、時々あはてもしてやつたので、後代徳川家康などのやうに、にや／＼し乍ら落つき拂つてやつたのだとは思はれない。そこに泰時、時頼のやうな人を造り出した源があるのではないかと思はれるが、とに角、泰時の人格、政に對する明恵上人の感化は、實に大きかつたやうである。泰時が、明恵上人に初めて逢つたのは、上人の

心の癪

稱念上人と癪者

天文年間、京の五條河原の邊りに癪病人村と云つて惡疾に悩む者ばかりが集り住んでゐた村があつた。この村は往昔、慧心僧都の頃からあつたもので、僧都は村人を哀れんで、彌陀の三尊を彫刻して與へられた。

法然上人の御廟所の南に草庵を建てて念佛修業せられておつた稱念上人は癪者を憐んで毎日此處に參詣せられては飢寒に苦しむ者に衣食を與へられたり、佛の道を説いて慰められたので、村人は上人を生佛とあがめてゐた。ところがその附近に心良からぬ者共がおつて、常に酒をくらつては黨を組んで亂暴狼藉の限りを



法然上人行狀圖 興福寺衆徒會議圖

傳に依ると承久三年の亂に、泰時が京都へ攻め上つた時で、上人が四十九歳、泰時が三十六歳の時であつた。明惠上人が關東調伏の祈禱をされたといふ噂が立ち、また梶尾山に京方の落人を數多隠

まつたといふので、安達景盛（傳記には義景とあるが、和田英松博士の考證に依ると景盛の誤りであるが）梶尾山に打ち入り遂に上人を捕へ、「大將軍泰時朝臣の前にて沙汰あるべし」と云つて、上人を先きに迫ひ立て、六波羅へ連れて行つた。

泰時は以前六波羅に住んでゐた事もあり、上人の徳を聞き及んでゐたから、先づ仰天して敬ひ畏れ、席を去つて上人を上座に据ゑ奉つた。

建久三年には畠山重忠が明惠上人に謁する爲めに、梶尾（高尾か）に参向したといふ記事が吾妻鏡に見えてゐるから、上人の徳望はかなり以前から關東武士の間にも聞えてゐたらしい。

上人が言はれるには、

「自分は若い時、本寺を出て處々を迷ひ歩いた後は、日頃習ひ置いた法文の義理が心に浮ぶ事さへもこひ願ひませぬ。まして世間の事などは一度も思量する事なしに、年久しく過しました。

それ故貴賤につけて、人の方人しようといふ心が起るのは、沙門の法にあるまじき事でたとへかやうな心が一念萌しても、二念と相續する事はありませぬ。それ故、どうして人の方人など致しま

盡しておつたので、村人は常に恐れおのゝいてゐた。

或る日上人がいつものやうに癪病人村の彌陀三尊に参詣せられた折村人が寄り集つて來て御法談を承り度いと願ひ出たので上人は

「汝等かやうに惡疾を病めるは皆過去現在になせる業の報ひである。たとへ今生はかくの如くの身なりとも、彌陀の本願を信じて、いつはりなく念佛相續すれば未來はかならず淨土に生じ、悉皆金色のはだへとなり、三十二相を具足し神通自在の身となれるのである。」

と説法して居らるゝ處へ、例の無頼の者共が酒をくらつて其の場に暴れ込んで來て、癪者を見て「汚らはしい奴等め、とつとと失せろ！」

せうか。またこれまで人の祈りも縁につけてして呉れと頼む人も大勢ありましたが、祈つて助ける事が出来るものであつたならば、三途に望んでゐる衆生を祈り助けてやらなければならぬ。それをみな祈り浮べてから、浮世の夢のやうな暫時の願ひを祈るべきである。

大事の前に小事なしと申して、さやうな事も致さずに長い年月を重ねてまゐりました。それ故、高辨（上人の名）に祈りを頼んだといふ人は、今生界の中にはよもあるまいと思ひます。また梅尾の山に落人を多く隠して置いたとの沙汰であります。すが、梅尾の山は三寶寄進の所で、殺生禁斷の地であります故、鷹に追はれた鳥、獵を逃れた獸等みな其處に隠れて命をつなぐのであります。それ故、敵を通れた軍士が命ばかり助かつて苦しい目を見ながら、樹の下、岩のはざまに隠れてゐるのを、わが身が咎めを受けて難に逢ふからと云つて、情もなくこれを追ひ出し、敵に搦め取られ身命を奪はれるのを知らず顔にゐる事が、どうして出来ませう。我が慈丈教主釋迦牟尼佛が因位の修行をして居られた時は、鳩の身代りとなつて

全身を鷹の餌とされた事もあり、飢に迫つた虎がわが子を食はうとして居るので、虎の子を助ける爲めに身を與へられた事もありました。さうした大慈悲はなか／＼及ばぬ事ではありますが、身の難を忘れて、人々が身命を失ふのを見て居るやうな事は致しませぬ。出来る事なら袖の中にも袈裟の下にも隠してやりたいと思ひます。今後とてもさよう致します。それが政道の難儀とあれば、直ちに愚僧の頸をはねて戴きたい』

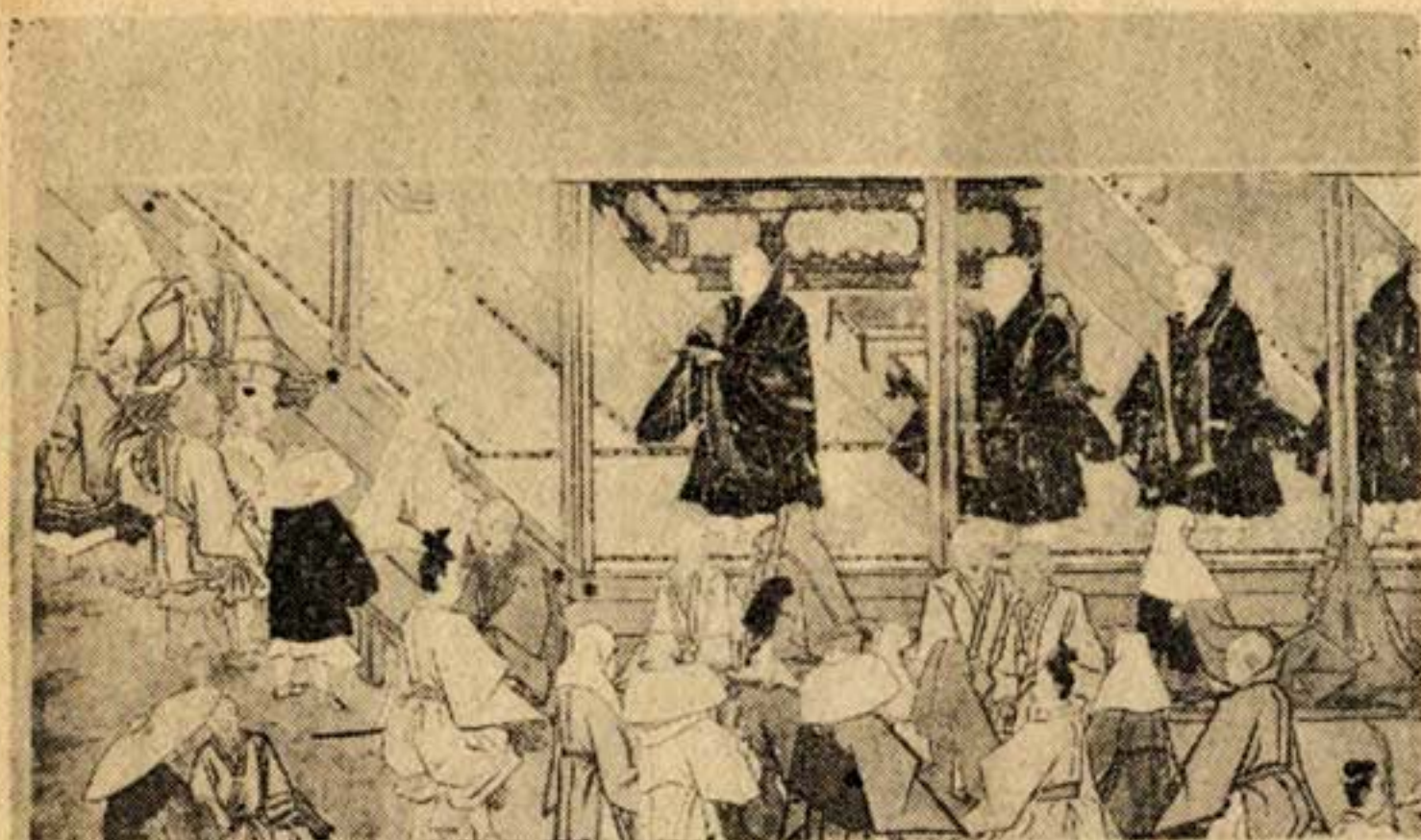
泰時は之れを聞いて、頻りに感涙を流し、
「仔細も知らぬ田舎夷どもが押しかけて狼藉し、あまつさへ御尊體を此處へ入れ申したのは、その恐少なからぬ事であります。無爲の上洛致すことがあつたなら、先づ參上致して生死の一大事に就いて御赦を歎願致したいと存じて居りましたが、かうした騒動に障げられてそれも果しかねて居りましたところ、今かうして不思議にお目にかゝりますのも、然るべき三寶の御計ひかと存じます」
「——それに就いては、生死を離れるには、どうしたらよいのでありませうか。またかやうな物沙汰にも、少しの私を入れず理の儘に行ひましたら

と追ひ立てた。一同は無頼漢を恐れてはゐたが、法談の有難さに打たれて誰一人立去らうとしなかつた。無頼漢はいきり立つて、傍の一人を毆りにかゝつた。之を見た上人は

「お待ちなされ」



と底力のある聲で制した。彼等の耳底を強く打つた。醉漢等は激怒して上人の前に迫つた。然し信念の強大なことゝ、修業によつて長く鍛へられた因徳とが現はれてゐる所には、暴力をもつて犯すこ



法然上人行狀圖 勝尾寺引聲念佛要法圖

ば、罪にはならないのでありませうか』
と、問ふと上人が答へらるゝには
『少しでも理に違ひて探舞ふ人は、後生までもな
く今生にやがて滅びる習であります。それは申す

までもなく、假令正理のまゝに行ひ給ふとも、分
々の罪脱がれぬ事もあつて、生死の助けとなるこ
とは思ひもよらぬ事であります。山中に嘯く愚僧
すら、猶ほ佛法の深理に叶はない時は、輪廻の苦
を免かれる事は出来ない。儘事のこのみ心を働
かし、雑念にほだされて佛法といふ事も知らず、
明しくらす人は尙更のことで、世に大地獄といふ
ものが現ずるのは、かゝる人が落ちて煮え返らん
ためであります。無情の殺鬼は弓箭にも恐れず、
刀杖にも憚るものでありませぬ。只今にも來たつ
て引き立てゝ行かうとしては如何なさいますか。
眞實に生死を免かれようと思ひ給ふなれば、暫く
何事も打ち捨てゝ先づ、佛法といふ事を信じてそ
の法理をよく／＼辨へた後、せめて正路に政道を
も行ひ給ふたならば、自らよろしき事もありま
せう』

そこで泰時は、大いに信仰の體に住して思ひ入
つた様子であつたが、やがて興を用意して上人を
御乗せ申し、自ら門まで送つた。

その後、世の中が鎮まつてからは、度々梅尾山
に參詣して法談をした。それから二年後――

との出来ないものが嚴として輝
いた。醉漢は進退に窮した。上人
は徐ろに説き給ふた。

「昔光明皇后は十善の御身を
以て、親ら癪病の膿を吸つて、
これを慰さめ給ふた。汝等癪者を
慰さむる所のないのみならず、反
つてこれを虐げなば、汝等來世に
は癪者となるであらう。凡そ見目
形如何に美なりとも糞尿の穢汚を
有しないものは誰もない。その糞
尿の汚穢、癪者のそれを相距たる
事遠しとなし得るや、淨穢美醜の
差はその心にあるぞ、吾が前に法
を聞き淨土を求むる者の心と、
病人を虐ぐる心とは相去る事極
めて遠い。汝等の心こそ正に癪
者たり。この心の癪は來世に必ら
ず身に現れるぞ」
醉漢共は皆懺悔し、本心に立ち
歸つた。

元仁元年に義時卒して、泰時が執權となつたので、丹波國に於て一ヶ所を梶尾山に寄進したが、上人は、「かやうな寺でも所領があれば住僧が如何に懶惰懈怠にならぬまでも、食ふにも着るにも困らぬなどと思つて、無道心な者共が籠り、寺の豊かなのに耽つて兒など置き、酒盛をし、兵具などを蓄へて不思議の振舞ひをするやうになる。立派な山寺の佛の禁を犯して淺猿しくなつて行くのは豊かな爲めに起因する。僧は貧にして人の恭敬を衣食とすれば、自ら放逸になる事はない。まことしく行道するところは、末代といつても十方檀那の修仰も厚いから自然に衣食共に豊かである。不律不如法の僧侶の肩を並ぶる所は、たゞ在家の者に謗法の罪を與へるばかりで、信仰歸依の輩もなく日に随つて衰微して荒廢の地となるのである。であるから共に誠に本意ではないけれども、二つを較ぶれば人が貴敬しなくなる事を憚つて、不律に振舞はないやうにして、暫く法令を闢ぐ方が勝つてゐると思ふ。——で、所領を寄せられてよい寺も他にあらうから、さうした所へ御計らひありたい。かやうな寺に寺領などのあるのは、却

つて宜しくなれないと思ふ。かへすゝもかやうに佛法を崇め給ふことは有難いと思ふけれども、此の旨に限り存する旨があるから……」

とて辭退された。

明恵上人の此時の御歌に、同人(泰時)寺領を奉まつらんと申さるゝを辭退申して云ふ。

ちぎりあらば生々世々も生れあはむ

紙つぐやうに續飯にはよらじ

泰時が生々世々の結縁のために、寺領を奉りたいと云つたものと見える。それで契があれば、いつの世にも共に生れられる。何も紙をつぐやうに續飯などの必要はない——といふのである。その返しとして泰時が、

きよければ着し食はじとは思ふべし

紙つぐそくひなにいとふらむ

心情くば寺領によつて着し食はじと思はれるのは去ることながら、紙つぐそくひ位の事なら御受けになつてもよいではないか——とすゝめた。それに返して又、

紙をつぐそくひもなにかほしからん

清き心は空にこそすめ

上人は一同に十念を授與して歸られた。時の人はその道を稱念路と云ふてゐた。

上掲寫眞説明

一、法然上人が淨土宗を開宗後卅年淨土宗が次第に民衆の精神をとらへ、その生活に浸透して來ると新しい迫害が生じて來た。元久元年十月、叡山三塔の堂衆が大講堂に集つて「法然念佛停止の件」を滿堂一致で決議し座主の眞性僧正に訴へた。

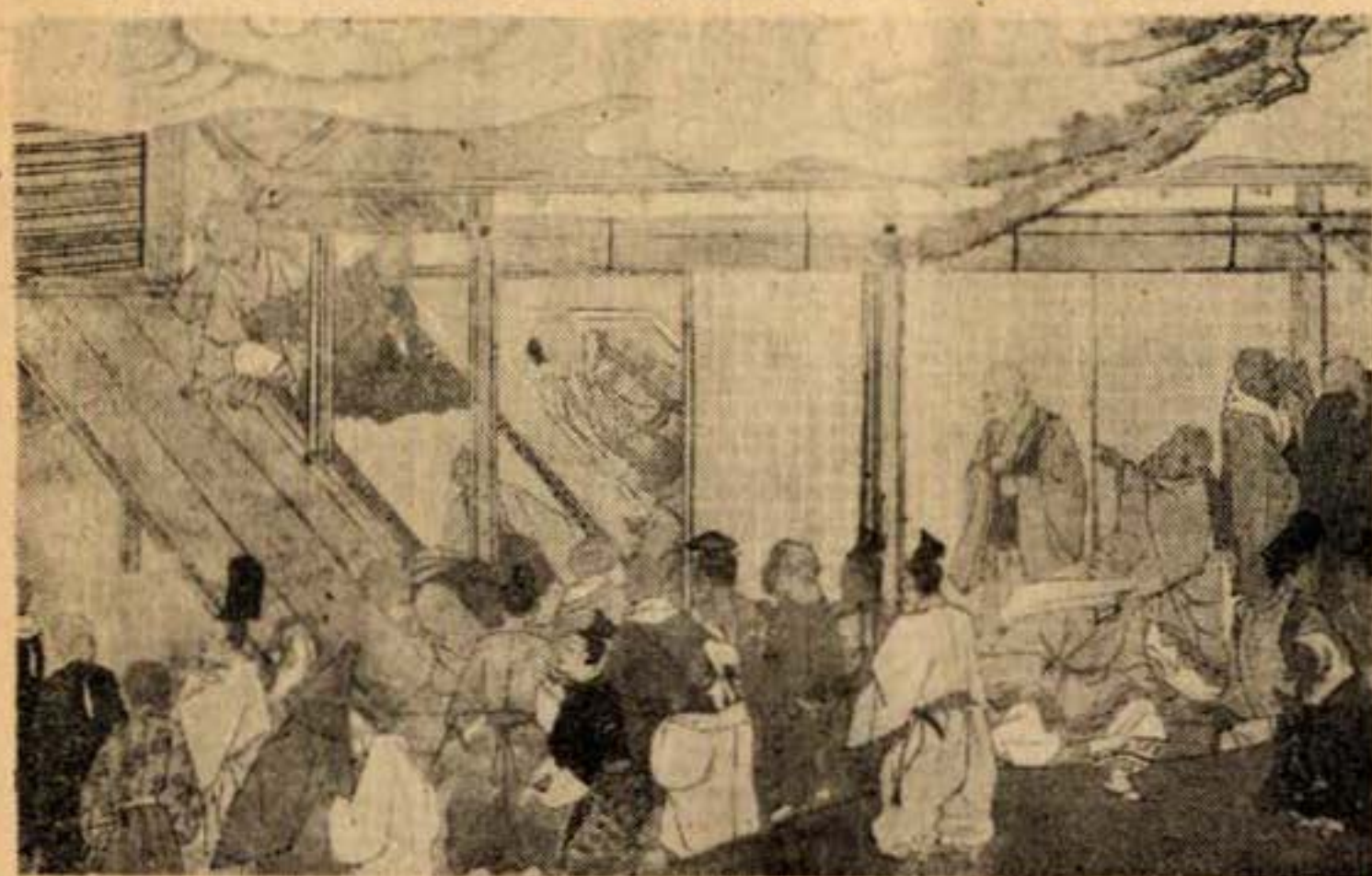
そこで上人は座主の尋問狀に答へて、七ヶ條の起請文をお書きになつた。これが淨土宗及び法然上人に對す具體的な迫害の第一歩であつた。

然るにその翌年九月、奈良興福寺の衆徒が蜂起し、朝廷に訟狀を上せた。その訟狀は九ヶ條に別

清い心には、紙をつぐそくひもほしくない——と云ふのである。

經ヶ島由來記

村上博了



法然上人行狀圖 上人御往生圖

朝とは言へ、眞夏の太陽は、焼くが如き光線をさんさんと投げてる、五三の老松間に隠見する宗像神社の大鳥居下を、笠を右手にとりつゝ、本殿へ歩いて行く一人の旅僧があつた。頑丈な大きい骨格、僧侶には不似合な肩幅の廣いがつしりした後姿、悠々たる歩調、何處となく人を壓する處があつた。

日やけのした赤ら顔ではあるが、頬骨の秀でた目尻の下つた親しみ深い相貌であつた、鳥居を出ると、社殿を顧りみて丁寧に禮拜してから、静かに踵をかへし前に茫々と展開してゐる海原の近くにまで行き、とある小丘に登つて海上を見渡し、遠く渚を打ち見やつては、左右に眼を轉じ附近の荒地林野を注意深く眺めまはし、打ち肯くこと數

れてゐて、法然上人の新宗別立を批難したものである。今から考へると随分くだらないことを並べてゐるが迫害はこれから引續いて下された。これは増上寺所藏國寶四十八卷傳、第三十一卷「興福寺衆徒念佛停止の圖」の一部である。これより三年の後、上人は弟子の罪を負ふて土佐の國へ配流せられた。

二、同じく第三十六卷、勝尾寺引鑿念佛法要の圖「上人御年七十五歳、承元元年八月配所を出られ、攝津勝尾寺に御滞在になつた。

一、當寺に一切經ましまさざるよしをき、給ひて、上人所持の一切經論一藏を施入し給ければ、住侶隨喜悅豫して、老若七十餘人、はなを散らし香をたき、幡をさゝげ蓋をさしてむかへたてまつる。この經論開題供養のために、聖覺法印

回、又、拜殿をかへりみては、恭しく合掌禮拜し、何にかを祈願する風であつた。

そも何を祈願したのであらうか、旅僧は誰れであらうか。

此の地一帯は往昔糸土郡に屬し、日支三韓交通上の要地であつた。神社より右方にある岬は、欽明天皇の御世佛教渡來後、佛像經典等佛教文化の輸入につれて、嘗て三韓から自慢の大鐘が非常な苦心の末、この地陸近くまで運ばれたところが、些細な不注意のために海中に沈んで以來幾春秋、いく度か巨額の懸賞附で、陸上げを試みられたのであつたが、水面近くまできては打ち沈みして、未だに誰人も挙げ得ず、今日でも岬近い織幡山の良の方五町位の沖に沈んでゐる。晴天の波靜かな時には、水を通してよく見えるとさへ言はれてゐるので、誰れが言ふともなく地名として鐘が岬又は鐘御岬と呼んでゐると言ふ事によつても亦交通上の要地であつたことが知れやう。

神社の前は昔に名高い玄界灘で、打ちよせてはかへす大波は常に物凄いであつた、殊に旅僧が眺めたその日は、風に乗る土用波が遠雷の如

き鳴り響きを立てては遠慮會釋も無く寄せては返し、かへしては寄せ遠く其の響は、壹岐對馬を越えて三韓が那にまで續いてゐたのであつた。

宗像神社は、古來より天照皇太神降來の靈地として、其の土地人に深い敬意を拂はれ且つは航海の守護神とも信ぜられてゐた。當時は七十有餘社が棟を接し、堂々たる外觀ではあつたが、數多い社殿は修造が充分で無かつたし、この地附近は、耕作開墾も亦充分でなく、營繕料に不如意の點も尠からず見受けられた。従つて、參詣する人毎に、あそこに、こゝに手入れしたらなあ、と思はれてゐた。參詣した旅僧も亦定めし此の感を深くしたもののらしいが、旅僧をもつと驚かした事は、うち寄せる荒波では無く、附近に荒田の多いことであつた。平坦であるのに何故かうも不毛田(荒田)が多いのであらうか、將又社殿の荒れてゐる所を想起しは、どうしてそうであらうかと考へずにはゐられなかつた。

この旅僧は淨土僧風の質素な白木綿の單衣に黒衣、鼠色木綿の大師袈裟をつけてゐたが、暫らくすると、法衣の袖を後からけ丘を降り、田地に

を招請せられければ、貴命をうけ再會をよろこびて、唱導をつとめられけり。云々」とある。

三、上人は慈鎮和尚の御寄附による大谷禪房に於て御往生遊された、同、第三十六卷、上人御往生の圖

「あとを一廊にくむれば遺法あまぬからず、予が遺跡は讃州に満すべし。ゆへいかなとなれば、念佛の興行は愚老一期の勸化也。されば念佛を修せんところは貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし。」との御遺言を後されて大往生をとげられた。

流行歌

「彼が今歌つてゐるのは流行歌かね」
「うんにや、奴が歌ひ出す前まではそうだつたんだが。」

立つて、土を手にとり、掌の上にころがしては熟視し且つ香ぎしてゐた、纏て荒れてゐるのは、海水の這入る爲である事を發見し、再び小丘に登り又は汀を歩いて見ては、古來交通上の要地として重きを置かれたこの地ではあるが、築港を築くと云ふ所まで注意が及ばなかつたのを觀て取つたのである。

その旅僧は、この時、この土地に永住することを決心した。そして小庵を結んでから漁夫達を屢々尋ねては、波の害は獨り田地を荒らす計りで無く、實に毎歲往還の客船漁船の難に遇ふもの甚だ多いこと、又、社人を訪ふては、社殿修理料に、濱漂海の寄物を以て、今まで宛てゝゐたこと即ち遭難物によつてゐることを知つた。それは甚だ神意に背くものである、どうかして自分の手でこの災害を除かうと發願し、それから幕府を通じてこの由を天皇に奏上、この曲村四十町を社殿修理料に宛てることと、防波島を作り衆厄を早く除かしめよとの勅書を賜つたのである。

時は、鎌倉時代、後堀河天皇の御代、寛喜三

年四月五日のことであつた。

打ち寄せる荒波は、如何に物凄くても、沈んだ梵鐘は上げ得ざる深さがあつたとて、防波島を築かざれば、此の地人は將來如何になるであらう、況んや、庶人歸依おかざる、かの宗像神社はどうなるだらうか。

神社の衰微は徳風の衰退となり、國家の恥辱である。どうしてもこゝに築いて庶人の災厄を除き曲村の田地を生かさねばならぬと誓願し、私利利慾を離れた純正利他の大慈悲心を以て、其の土地人を動員し、自から防波島を設計し先達となり、ある時は杭を打ち、土を運び、日夜苦心慘憺の末立派な防波島を完成した。それこそ文字通り血を絞る苦闘であつた。身は一介の旅僧、其土地に一人の知人もなく、又あの荒波荒磯では、とても駄目だと信じてゐる漁夫地人をいく度か説得し、築島工事にとりかゝつたからだ。

今日のすゝんだ利器を利用してさへ、仲々の難工事と考へられるのに、當時粗雑な道具、小さき船、小人數の微々たる人力を以て

しては、幾度か絶望を叫ばせたのであつたが、旅僧の意力は毫も衰えを見せず、絶望とさげばきく程に庶人を鼓舞した。やがて村人もその誠實意氣に動かされて、遂には自然の暴威を征し築港は成就したのであつた。一名經ヶ島と呼ばれてゐる、この孤島は筑前國續風土記大宰管内志、或は海東諸國記に、京泊り、又古波止と言ひ交通上の要港とし庶人往還の便となり、鹽水の田地を侵すを防ぎ、其の利益を享受したのである。この旅僧こそ誰であらう、宗祖法然上人の弟子往阿彌陀佛其人であつた。

尊徳の生活

四六期二二〇頁
價七拾錢

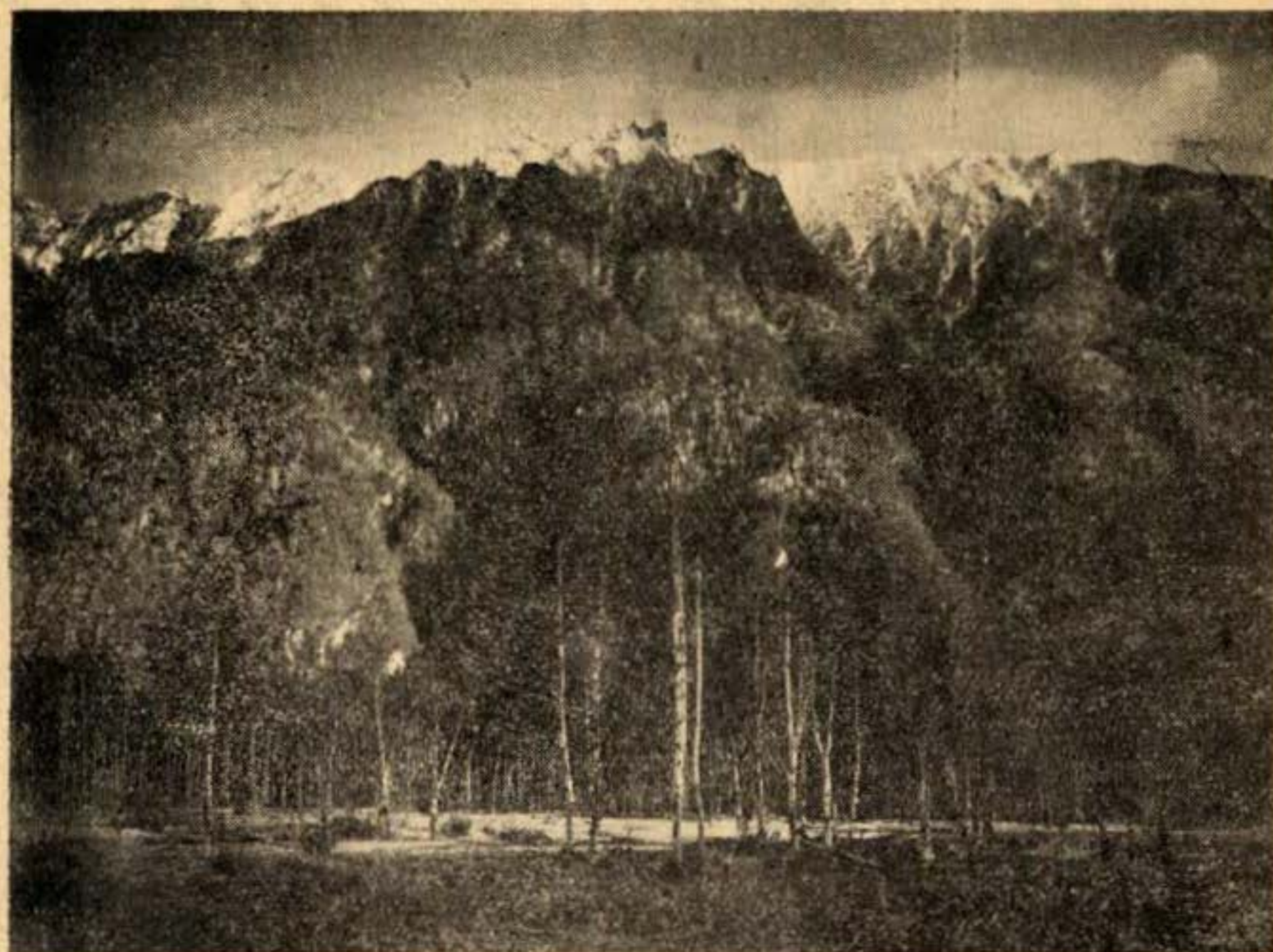
奥平祥一著 我々は尊徳先生の傳記や思想を知るのみで満足してはならぬ。我々の日常生活と尊徳先生の行跡を照し合せてこそ始めて尊徳先生の偉大さが感得されるのだ。文章は平易、物語としてまたよし。

白道を歩む

四六期四〇〇頁
價一圓廿錢

山中兼太郎著 白道これは淨土に生れんことを願ふ純情の信念である。人間は宜しくこの白道を歩みたいものだ。本書は人生の白道を説いたもので受難の人生を歩むものゝ指南書であり修養書である。

東京神田 同文館刊 振替東京一三五番



様を求める山の實話

山での宿命

富山雅夫

山を歩いてゐると随分色々なことにぶつかる。熊や鹿や猿などの野生動物にひよつくり逢ふといふ、視覚的な珍しさばかりではない。人的交渉に於ても、私達は屢々思ひがけない事件に遭遇することもあるのである。

此のやうな場合、それが人里離れた山の中だけに私達にはとくに印象的である。或は一生忘れ得ないやうな傷痕を心の奥深く刻み込まれることさへあるのである。以下私が物語らうとする、わが畏友日氏の深酷なる體驗は、聴手である私の心さへ少なからずうつたものであつた。それだけ氏にとつては忘れがたない追憶ともならうし、また此の大宇宙を支配する輪廻の大きいなる力に常住膝まづきたい敬虔な氣持に落着かれたことでもあらうと思ふ。己が弱さの自覺とは

畢竟、氏にとつてはより高い存在の肯定となつて今では氏の心にしつかりと宿つてゐるやうである。何故ならば、常人ならばその恐しい追憶におびえて、も早や山行きを断念するであらうとは思はれる位異常な事件に遭遇されたのであるが、氏は未だに登山を繰返して、いよいよ自覺的に宗教的な山の見聞に務めてゐられるからである。氏の場合、登山は氏の全生活の對象となつてゐるやうである。



話は七、八年前の夏に戻る。連日に渡る秩父の山歩きにすつかり疲れ切つて、H氏が中央線の鹽山驛に歸り着いたのはその夜も遅かつた。次の新宿行の夜行までにはまだ充分時間があつたので、そこは山歩きに慣れた者の氣輕さ、早速、リュックサックから雨合羽を取出して、ごろり驛のベンチの上に横になつた。何しろ疲れてゐる身體である。微睡むともなき微睡に何時しか陥入つて了つたが、俄かに慌たゞしい人聲なので、ふと眼を開ける

と、丁度下りの列車が到着したところで、リュックサックの表甲斐々々しい四人の登山者が今にも改札口を出て、氏の傍らに近附いてくるところだつた。二十歳を僅か越したばかりの青年二人とそれより年長の二人である。寢呆け眼をこすつて起上つた氏に、その中で一番元氣らしい青年が親みやすい微笑を浮かべて「何處へゆくのですか。」と云ふ挨拶なので、「いや、歸るところです。」と答へると、問はず語りに青年は「私達はこれから笛吹川の東澤をやるんです。」と誠に意氣昂然たるものがある。今でこそ笛吹川の東澤から甲武信嶽へ取附くのはさしたる難事ではないが、當時はあの「破風の夜嵐」と琵琶にまで歌はれた、帝大の若人達が其處で花盛りを散つてからはその邊一帶を人々は魔の谷などと恐れてゐた。半は誇らしげに東澤行きを云つて立去る一行を見送りながら何氣なく氏が一行の足下を見やると、登山靴も草鞋も穿かず普通の短靴にゲートルといふ足ごしらえで、あれで谷歩きをするのかしらとチラとその瞬間、危惧の念

を抱いたさうだが、何しろ一行の元氣は天を衝かんばかりだつたし、大きなリュックサックの中に、草鞋が秘められてゐるのだらうと考へて折しも降り出した霖雨の中に消えてゆく四人の姿をぼんやりと見送つた。

ところが氏が歸京して、二三日後、新聞に二段ぬきで「笛吹川遭難」が報道されたのである。目をくり、救助された二人と未だ死體發見に到らない二人の年齢、風貌を綜合してみると、どうしても鹽山驛で會つたあの四人連れに違ひない。氏が暗い感慨にうたれたことは云ふまでもなからう。

さて、時は移つて、それから二年後の秋に變る。一昨年の慘劇を何時の間にか忘れ去つて氏は單身笛吹川を遡行して、ひとしほ深い秋を秩父の心臓部に探らうとした。秩父往還を廣瀬の部落から切れていよいよ笛吹の谷へ入る。東澤と西澤の合流點、兩股を左に見、物凄いいホラノ貝の深潭を探つてから一人旅の氣安さ誰に氣兼ねも入らずブラリ／＼と谷深く入つてゆくと、やがて紫色の黄昏が重々し

く兩側の原生林を覆ひ初め、井戸の底から見上げるやうな空の斷片には星がかすかに銀砂を撒き散らし初めた。聞へるものは轟々と高い瀬の音ばかり。今宵の時はどうせ此の谷と初めからの豫定なので、好い泊場を求めつゝ、かうなると心細い一人旅を更に上流へ上流へとつめていつた。やがて金山澤が左から合する所で釜ノ澤に入ると程なく龍門ノ瀧に出る。瀧壺を右にへづつて落口に立ち、時計を見るともう五時過ぎで、秋と云つても冬の早い山の夜ではもう吐く息も白く見えてくる。少し焦り氣味になつて泊場を探し求め、氣持のよい滑めを渡つてゆくと右岸の岩が突出してゐて、その上にならしたやうに平で雜草の繁つてゐる所がある。吻と安堵して、するすると岩を攀ちその岩の上に立つた時、氏は足元の岩盤が不意に覆へるやうな戰慄に襲はれて思はず立竦んだと云ふのだ。

深い眼窩は恨めしげに天を睨んで腰のあたりにはズボンと上衣のバンドの金具がその儘そっくり重なつてゐる。傍に打棄てられてゐる寫眞機らしいものも殆んどレンズを残すだけで、幾歳月かの風雪雨に總てが腐り切つて、たゞ固い白骨がキラリ夕闇の雜草を切つて無氣味に光つてゐるのだつた。そのとき氏の腦裡に電光のやうにひらめいたのは一昨年の夏鹽山驛で會つたあの青年の姿だつたと云ふ。何か叫び出したい氣持だつた。もう二度と再び聖域を侵さないから今度だけは助けて欲しいと何者に對するとも知れぬ哀願、祈りの心も湧いてきた——。ともかくも動轉する心を押さへて簡單な回向を捧げたが、追ひ立てられるやうな恐怖感で、今は全く暮れはてた谷を目懸けて一目散に駈降りた。晝でも相當危険な谷を必死の勢ひで遡行し漸く八時頃には源流地をぬけて甲武信から、木賊、それから鶏冠へと折れる尾根の一端に辿り着いたが、空腹な身に疲労は増すし、半ば昏睡状態で二、三分休んでもすぐ襟元を掻んで引起さ

れるやうに自らの身震ひで眼を覺ます。周章てゝ夢我夢中で登り出す。再び昏睡、眼覺めては登攀、そんな状態で今は身動きもならぬ倭牛林の簾くぐりである。その時、ふと氏が右手鶏冠谷の方へ眼を外らすと、何と團々たる赤い灯が氏の眼に映じてきたではないか。火一人、とすぐ關聯して考へるのは強ち登山家のみには限るまい。思はぬ喜びにわれを忘れて「おーい」と絶叫した。ところが、すぐにも應答がある筈の其處から何の答もない。再び喉も裂けよとヨホーと繰返した。が、聲は陰氣な木霊となつてあちこちの小尾根に突きあたり、谷々に分れて這ひ廻るだけだつた。靜寂のかぎりをつくした黒木立の間に幾つにも分れて叫び合ふ妖精達——。

氏は初めて、それがあり得べからざる所の火であることを知つたと云ふ。鶏冠谷と云へば土地の者さへ入つたきり歸つては來られな

である。

それから六時間、原生林の下生えの中を疵だらけになりながらひたすら上へ上へと這ひ上る氏の姿が八千尺級の大尾根にあつた。精根失せた身を、ともかくも深夜の二時、甲信信小屋まで運んだのは氏の並ならぬ精力と元々佛門出の氏の経歴が然らしめたものと私は

思ふ。

翌早朝下山して早速、廣瀬の部落に報告し種々調査したところ、二年前數ヶ月に渡る大捜索にもかゝはらず未だに發見するに到らなかつた例の二名の遭難者の内の一人、然もそれは去月鹽山驛で氏に親しげに話しかけた青年茅根一氏の悲しき亡軀であることが分つた



東澤の法螺貝

のである。偶然と云ふべく餘りに不思議な因縁に、氏は寧ろ崇嚴な面持でかう私に云ふのだつた。

「鷄冠谷へは是非入つてみようかと考へてゐます。彼處では取残されたもう一人がきつと私を呼んでゐたのだ。」

氏はこゝ二年間に上下二巻、總ページ千四百頁を超ゆる大部な「奥秩父」と題される、他に類を見ざる底の研究書を刊行された。刊行し終つて氏もまた感慨深いものがあるであらう。

努力の果

暗い晩であつた。無燈の自轉車にのつた男が四ツ角のところまで來たが、さてどつちへ行つたものか迷つて仕舞つた。だが闇をすかして一本の柱の上に示道標のやうなものがかすかに見えた。彼はポケットをさぐつてやつと一本のマッチを見付け出した。彼はその柱にのぼつて行つて、注意深く火を點じてその標札を讀んだ、

「ペンキ塗立て」と、



伸^のびる日^ひ

縮^{ちぢむ}む日^ひ

眞野 正順

○「おゆるし」の日

以前、増上寺の婦人會に關係を持つてゐた頃、毎月集つてくる女性達の中に、ひとり、際立つて明るい性格をもつた少女がゐました。少し丸顔の、くるつとした眼には、いつも微笑が輝き、陽るい聲が、すぐに其唇から綻びてくる。何事にも、その天真をぶちまけてゆく朗かさが、皆に好かれて、△△△といふ愛稱さへ貰つてゐました。

私なども、その少女に逢ふと、我れ知らず微笑が頬に浮んで、何か話しかけて見たくなつてしまふのですが、或る時、ふと、その少女の家庭には面白い習慣のあるのを聴きました。

毎月一度、その家の子供達には「おゆるしの日」があるそうです。その日には何

を爲しても叱られない。障子に足をつつ込んでも、家の中で大聲に歌を唄つても、お菓子を食べ過ぎてても、少しも叱られない。両親は黙つて、それを見て微笑してゐる。ですから兒供達は、てんぐに仕たい三昧のことをして、伸々とその日一日を暮す。

そうして、翌日になると、笑ひながら糊皿を持出す母親に手助つて、昨日破いた障子の穴なぞをせつせと切張して、やがて「お行儀のよい」平常の生活にもどるのだそうです。

この話を聞いて、私は、少女の持った朗かさも故あるかなと思ひました。そうして、それだけ行届いた両親の温かい心づかひを、むしろ羨しく思つたのです。

誰だつて、我兒は伸々と育てたく思ふ。殊に、種々な境遇の下に、己が素質を伸さんとして伸ばし得なかつた人は猶更です。せめて子供だけは自分と違つて伸々と、この日光の下、この大地の上に生い立て、やりたい。世路艱難の間に、いつか萎縮してしまつた自分は仕方ないけれど、可愛い我子だけは、満足にその持つて生れた天眞を伸すやうにしてやりたい。人間一生、二度と還つて来ぬ少年時代だ。せめて其間なりと、あまり窮屈な思ひをさせたくない。

—— 然う思ふ。——

ですが、さて實際に、我兒を前にして見ると、また別種の心配が、むら／＼と生き起つてくる。かうして放漫な成長をさしてゆくと、「忍耐」といふ大切な素質が無くなつてしまふのではないか。かう我儘ばかりさせておいては、却て世間に出て困ることに成りはせぬか。そう思ふと、どうしても、少しづつ矯めたり規律づけたりせずにはおられぬ。それが、子供にとつてはひどく窮屈な思ひをさせることになるのは、譯り切つてゐながら、どうしても、然うせずには居られぬ。殊に、自分の惡癖なぞが、我兒の舉動に現はれて来るのを見つけ出すと、もうヂツとしては居られない。厄鬼となつて早く、それを揉み消してしまいたく思ふ。さんざ、自分の營めて來た、その癖の苦い結果を思ひ返せば、それだけ、力を込めて、一刻も早く、子供から、その萌芽を取除いてしまいたく思ふ。

—— こんな風で、また、知らず／＼子供の上に窮屈な束縛を重ねてしまふ。「親ごころ」とは、いつも、かうした矛盾に悩むものです。

○幼兒の「ひがみ」

この事に就て 私の知人に、いつも其親を恨んでゐる人があります。

その人が生れた時には、相憎と母親が病氣に罹つてしまつたので、田舎に里子に出される事になつたのです。

その頃——といつて明治二十何年頃ですが——の人の考は、ごく單純だつたのです。都會の子より、田舎の子は丈夫だ。だから、子供は田舎で育てたがいゝ。それだけの考で、ろく／＼調べもせず、今の吉祥寺邊の農夫の妻に其子を渡したのですが、運が悪かつたのです。農夫だとして純朴とかぎりません。いゝ加減な事を云つて、嬰兒を受取つて來た。其農夫の妻は、實はもう乳は涸れてゐたのです。

ですから、乳は足りないし、練乳などとても無い其頃の田舎の事ですから、どうして育てたものやら、初めは米の粉でも溶かして飲ませたのでしやう。だん／＼終ひには、農家の主要食であつた芋などの類を矢鱈に喰べさしてゐた。

それが、交通不便のその頃ですから、親許の方には少しも知れずにゐた。まあ本當によくぞ死にもせず、生きてゐたと思はれるのですが、三年経て、再び家に連れもどされた時には、すつかり骨と皮に瘦せ細り、たゞお腹だけが——不消化物の停滯で、氣味悪く丸々と膨れ上つて、謂はゞ、畫にかいた餓鬼の姿同然であつたそうです。

両親は、今更に驚いて、その治療に力を盡したのですが、幼い内臓に不消化物を、やたらに詰込んだ爲に、胃袋が伸び切つて、ひどい胃擴張になつて終つてゐたのです。それを恢復するために、親は醫師と相談して、當分の間、其子に與へる三度の

食事を御飯一杯と極めて、實行する事にしました。そうして胃袋を收縮させやうと云ふのです。

頭はない兒童にとつて、それが恐ろしい苦痛であつたのは云ふ迄ありません。そののみでない。家には大勢の兄弟がゐて、食事時やお入つとなれば、てん／＼に思ふ存分、飽食する。それを空しく眺めながら、餓しい腹をかゝえてゐる、「里歸り」の幼兒の心情はどんなであつたでしやう。

こんな風にして、幾歳月かの後、親達の手段は見事奏功して子供の「肉體」は再び、その健全さを恢復しましたが、然し、その時、深く刻みこまれた心の「疵痕」は末久しく残つてしまひました。

成長した後、その人はよく私に云ふのです。

「自分には、他の兄弟達に似ず、何かにつけて卑屈な性質がある。必要もないのに、いやにおど／＼と相手の感情に氣をかけたり、つまらぬ事に妙にこだはつて出し惜しみしたりする。それが、みんな其頃に養はれたらしいのだ。食事の時など、兄弟は、お櫃から飯を何杯も自由にすくい上げて喰べてゐるのを、そつと盗見しながら、自分の小さな茶碗の底の飯粒を一粒づゝ箸で拾つてゐた氣持や、甘さうに嚙つてゐるお菓子の、その小さな一片を、何とかして、分けて貰ひたいばかりに、一心に兄弟達の御機嫌をとりつゞけてゐたさもない少年時代の自分の

姿が、今だに眼の中に残つてゐる。その時の氣持が、今になつても、どうしても脱れないのだ。何かにつけて、さもない卑屈な氣持がわい／＼と出て來て仕様がなない。それでこれまで幾ら恥かしい思ひをして來た事か……」

幼ない小兒の心にと纖弱なものはない。そこに刻みつけられたものは、第二の天性となつて、生涯拭ふても拭ひ消せぬ痕を残してしまふ。

世に誰あつて、我兒のために悪かれと願ふ親はあるまい。その子の將來の健康のためと思へばこそ、目を瞑つてした強制であつたのですが、その結果は、思はぬところに現はれて、その兒の生涯の苦い暗影の種をつくつて終つたのです。

思へば、つく／＼と、兒は伸々と育てたく思ふ。

○「準備」だけの教育

今の教育は決して「伸びる」ことを教へない。たゞ「準備」ばかり詰込んでゐる。

この頃の兒童の哀れなること、どうだらう。

小學校も五年六年となれば、もう兒童には明るい日向は無い。朝は早くから終日ぶち通しに學校に残り、夜は歸つても、十時十一時まで蒼ざめた机の虫になり切つてゐる。そうでなければ、上の學校に上つてゆかれないのです。であるから、この

頃の兒童は誰を見ても、もう眼は異様に光つて、頭は詰めきれぬ連日の暗記に一杯になつてゐる。

この頃の小兒を見て、こんな少年時代に再び還つて見たい夢をいだく者が誰一人あるだらうか。

それも、小學校だけで終結するのではない。中學は高校を、高校は大學を、大學は就職を、と、つぎ／＼に鐵のやうな嚴めしい門扉がギツチリと重り合つて待ち構えてゐる。

今の教育は、たゞ果しなく喘いでゆく「準備」の連續である。

そればかりではない。一步進んで、その「教育」の内容に入つて見ると、また、これが「準備」の詰込に外ならないのだ。

今の教育の眼目は「準備」にある。この社會に立つて生きてゆく爲に、必要と思はれることを、片つ端から拾集め、列べ上げてそれをセツセと柔かい頭腦に押込むことだ。

小學もそれ、中學もそれ、大學もそれ。この社會に生きぬけて行くに必要と氣のついたものは、少しでも多く詰こんでおけば、それで、將來有用な人材が出来る。そう思つてゐるだけである。

それが、何ういふ風に少年の柔かい精神に消化され、どう作用して、その「自己」を形づくつてゆくか。少しも顧慮されてゐない。消化も不消化もない。たゞ營養表片手に眼を光らせてゐる數圖のごときものである。

だから、今日の少年の境遇は、狭い窮乏な迷路を押し合ひへし合しながら、驕り立てられてゐる羊の群に似てゐる。のび／＼と自己の本分を伸して見る明るい青空はない。たゞ頭上にかぶさつて来るものは、他人の選んだ「將來生活への材料」の果しない累積である。

だから、だん／＼青年の「自ら伸びる力」は日を逐ふて萎縮してくる。そうしてそこに現はれてくるものは、「人間の機械化」である。

○人生はマラソン競走

いくら、知識や経験を積重ねても、それで人間が成長するものではない。成長は、内から伸上る力です。

内から、ぐん／＼伸び上つてゆく力。その勢ひの中に、おのずから、色々な知識や経験は消化されて營養となる。いまの時代に特に感ぜられるのは、この内から伸び上つてゆく強靱なる力の缺乏ではないか。

かう、社會が多數となり、複雑となつてくると、人生はマラソン競走である。その志を伸ぶべき機會を獲るためには、幾度かの苦難や失敗を、くぐり脱け／＼して、倦まず進んで行かねばならぬ。

人は人生の間、かならず、一度か二度其志を大いに伸ぶべき時期にめぐり逢ふ。その時こそ、己が全身を空しうして、そ

の機會の中にウンと伸びて行かねばならないのだ。

然るに、その時機に逢遭すると——多くの人は——そこで、グンと伸びるべき氣力とネバリとの缺乏を感じる。伸びる力が、すでに涸れかゝつて終つてゐるからである。

だから、社會の「山」の麓には、何時も大集が押し合ひへし合ひ犇きあつてゐるが、上に行くに従つて、だん／＼人間は稀薄となり、頂上では、たえず、人材の缺乏が、呟かれる。

つまり、伸び通してゆく力を蓄えた人間が足らないからである。

現今の教育は、たゞ麓で犇き合ふ技術のみを教える。かんじんの伸びてゆく力の「培養」とその「心得」とは、投げばなしである。

○伸びる「心得」

伸びるためには、常に、その氣力を培養しておく事が、必要であるが、それだけでは足りない。更に、その伸びる時の「心得」を辨えておく事が、必要です。

「いざ、伸びん」とする絶好の機會に逢着した時に、人は、かならず、何かしら、躊躇く氣持に襲はれる。それは、その大事の前に、何かしら自身の力の不足さが、犇々と感ぜられてくるやうな、一種、危険に面した時のやうな氣持になつて、思はず

一足、後に引いて、その事から面を外らせやうとする。つまり其の急激な飛躍が齎しはせぬかと思はれる失敗を、先づ怖れるのです。その事に萬一、失敗なぞすれば、今まで折角築いてきた「自分」が、まつたく空に歸してしまふのを怖れる。つまり今まで、續けて來た「自分の殻」の崩壊を、まづ、怖れるのです。

然し「竹は節がなければ、伸びぬ」節にきた時、竹は今まで筒の儘では伸びて行かれない。そこで、今迄の筒に一區切りつけ、全く新なる筒を作つて伸びて行かねばならぬ。

そのやうに、人が大いに伸びんとする時に、先づ何よりも先にふり捨てねばならぬものは「今迄の自己」です。古い小さな殻を背負つたまゝ、更に大きく伸びやうとするのは、出來ない相談です。乾坤一擲して、こゝに小さな、今までの自己の心づかいを思ひ切つて抹消してしまひ、新たなる世界に全身を没入さしてゆく勇氣を振ひ起さねばならぬ。

自己を抹消するとは、その事の中に大死一番する事です。すなはち、自己の全分を擧げて「空」に歸することです。

新たなる、より大いなる世界に躍り出でるためには、人は、何時でもこの「我」を抹消して、この森嚴な「空」の境地に貫き出でなければなりません。

○慢心の殻

しかし、人は、一たび飛躍を遂げて少しく、伸び得ると、たちまち復た、次の「我」に、囚へられてしまふ傾きを持つ。快心の飛躍を遂げると、人は、先きの「我」の躊躇と反對に、たちまち「我」の新たなる膨大に、自から感心して、漫心してしまふ。

「今迄の自己は間違ひ、「我」は何時でもこんなもの」と思ふからである。

然し、このやうにかの流動極みなき「空」の飛躍の中に「我」の小さな核心が意識されてくれば、もうそれで其人はお終いである。その時は、すでに、新たな慢心の「我」が「殻」を作つて、ひし／＼と自己の眞生命を包んでしまつてゐるからである。

時機來つて、事業の上に一つの躓きを引起すやいなや、たちまち、其人はその慢心の殻と共に急激に轉落して、以前、その以前の境地よりも下へと没落してゆくのが常である。

はじめに、生命の飛躍を阻むところのものは「我」の躊躇であった。後に、その伸長を障げるものも、復た「我」の慢心であった。伸びんとする道程において、常に振り切つて行かねばならぬものは、この、粘々しき「我」の緊縛である。

往古久しく「無我」を語り、「空の境地」を提唱して來たわが深奥なる東洋思想の教ゆるところが、こゝに再び味ひ返されて

來ねばならぬ。

○縮む力

伸びることの爲めの、第三の用意は「縮む」ことである。

人は、伸びる力の大切なことは、知つてゐるけれども、伸びて後、よく縮むことの大切な事を忘れ勝である。

「家計を膨脹さすは容易いが、縮めることは困難だ。」とよく人は言ふ。縮める強靱な力が養はれてないからである。

本當に伸びる爲には、先づ好く縮む力が、あらかじめ用意されてゐなければ、必ず不安である。環境悪しきに來ると見るや忽ち、陣をおさめて、肅然たる舊の生活に歸り得る收縮力がなければ、大いなる事業に手を出すのは、よしたがよい。

一度ひろげた華美な生活にひきずられて、境遇すでに、それに堪えなくなつた後になつても、いつまでも、外面を糊塗してゆく人生の失敗者の、救ひがたき没落の道は、多くこれである。

尺獲は「伸びんがために屈する」ばかりでない。伸びて後、よく縮む力を持つてゐるからこそ、絶えず、進んで行かれるのである。

そのやうに、よく縮む力の自信を持つてゐる者にして、はじめてよく精一杯に伸びることが出来る。底に最後の安心を持つてゐるからである。

縮む力の養成。それは久しく、この社會から忘れられてゐる。然し、誠に、それが、伸びてゆく力の眞の基であり、彈機であるのだ。

この意味で、我國に古來久しく行はれてゐた一つの習慣を興味深く、思ひ起す。

それは、例月、家庭に行はれる「精進日」の習慣である。父祖の命日、或は宗祖の忌日には、つましい家庭では、酒をたち、肉類を斷つ禁慾の習慣がある。一切の享樂と慾望とを抑へて、ひたすら故人の徳を偲ぶ日である。その上流と下流とを問はず、その日一日、それ／＼の家庭で、一同が粗食に服することは、こゝに強靱なる收縮力を養成するのに、づいぶん力があつた。

——古來の習慣にも、いろ／＼隠れた意味がある。

つましいやかな古風な家庭から、よく傑出した人材を出すのも、その原因の一つを、こゝに潜めてゐるかも知れぬ。

味の ある 『もつた い な い 話』

東京市の郊外に、大きな庭園を構へた豪華な邸宅がありました。その庭のはづれは高い崖になつてゐて、その下には溝一つを隔てて貧しい小さな家が澤山並んでゐました。

或る時、その邸の主人、某會社の重役氏が崖の眞上にあたる庭の隅で子供さん達を相手に遊んでおりました。その中子供さんがおねだりでもしたのでせう。墓口を開けてお金を渡さうとしたその



指の間から十銭白銅が一つこぼれて、アツと云ふ間にころ／＼崖の下に落ちて仕舞ひました。重役氏も思はず子供さん達と一緒に崖の下を覗き

込みましたが、白銅貨はばちやんと、溝の中へ落ち込んで見えなくなつて仕舞ひました。

『しまったことをしたな？』と重役のお父さんは子供の頭を撫でると、それでもう十銭白銅のことは忘れて仕舞ひました。

ところが、それを崖の下の方屋の人が見ておりました。『確かに銀貨が落ちて来た。もつたいないことだ』と、その人は溝の中を探し始めました

夜になつて會社の重役さんはその崖の下の人々が、懐中電燈などを照して溝の中に入つて一心に何か探してゐるのを崖の上の邸から見ました。重役氏は何をしてゐるのだらうといふかつてゐるのです。晝間自分がお金を落したことをすっかり忘れてゐるのでした。

暫くすると、女中さんが、『崖下の長屋の人が、晝間お落しになつた十銭白銅が見付かりましたと、届けて下さいました』

と主人に告げに参りました。それで、重役氏は懐中電燈をつけて溝に入つてゐた長屋の人々の行為の意味が解りました。

重役氏は自分の行為の恥しさをしみ／＼と味ひながら、青砥藤綱の話聞いた時とは別な気持ちで、掌の上に乗つてゐる『汗の結晶』を眺めました（をはり）

夫婦とは

亭主『君も君のお母さんのやうにうまく飯がたけると良いんだがなア。』

妻君『貴方も貴方のお父さんのやうにお米を磨いで下さると良いんだけれど』



鬼界島

俊寛僧都

島 四 郎

さて、平清盛は己が天下を恣にするためにその權門に少しの敵意を示すものとか、または隠れて反旗を翻すものとかに對し、絶えず密偵を放つて毫も假借するところがなかつた。遠流、追放、焼打等の刑罰が、それらの人々に加へられたことは申すまでもない。新大納言成親卿が幽

囚の身となつて、つづいて子息丹波の少將成經、平判官康頼、法勝寺の執行俊寛僧都の三人が薩摩方鬼界島に流されたのも、さうした清盛入道の權勢獨裁の犠牲のひとつであつた。安元三年の秋の終りごろ、鬼界島の住人達は、物珍らしい遠い都の三人の流人の姿を奇異の眼をもつて迎へ入れたのである。が見るからに物腰の優美な三人が、いちやうに悲しさうな表情を面に湛へながら、一向に口を開かうとしない様子に、島帽子さへかぶらぬ島びとたちは、何と挨拶の

言葉を述べて近づいたらいいものか、とんとその機會を見出し難かつた。——いつた鬼界島は十二の島々から成つてゐる。いまこの三人が流されたのは、その中程に位置する硫黄が島であつた。島の中には高き山有り、鎮に火燃ゆる。硫黄と云ふ物充ち満てり。故にこそ硫黄が島とは名付けたれ」と云はれてゐるから、島の中心は谷々に硫黄を湧出する活火山が聳えてゐた。さうして海へ下る平地に、儼かに常食とする琉球芋の畑を有する島民は、全身毛深く、色黒く、牛のやうだと記されてゐる。女達は勿



論都のやうに髪を下げてゐない、いや、衣装らしいものも身に著けない彼等には、天變地異のあるたびに殺生のみが先だつた。然し、兎も角三人はべつだん島民の迫害を蒙らずにどうやら流地の生活を形づくつて行つたのである。それには成經の舅に當る平宰相教盛の領地、肥前國鹿瀬の庄から便船のあるたびに衣食を送つて來たこと

も、流入達の心を力づけてゐたのであつたが、……彼等は岩蔭にひとつの庵を結んで暮してをつた。ところで、成經と康頼はもとより神佛の信心あつく、平生歸依する熊野權現をこの地に勧請し奉つて、都にかへる日の實現を一時も速かにしたいものだと思願の相談をするのだつたが、ひとり俊寛はおのれの不心を主張してそれに耳を傾けようともしなかつた。

そこで二人は俊寛を打棄つたまま、同じ心をしつかり結んで、島の中にもしや熊野に似合うところがないものかと尋ね廻るのであつた。幸、南を望めば大海原が漫々と横つて、雲の波煙の浪深く、北を顧みれば、

峨々とした山岳の間からは百尺の瀧が漲り落ち、神さびた松風の音はそよ風に飛龍權現のおはす那智の御山を彷彿させる場所に行當つた。二人の者はこの嶺が新宮、あれは本宮、またその王子社などと名を申して、日毎に熊野詣での眞似をいたして、歸洛の願ひ事をする事になつた。兎角するうちに、もはや社に參籠ときめて、晝はひねもす夜はよもすがら、丁度行者のするやうな寢食を忘れた祈願の行に移つて行つた。だから、もとの住ひには俊寛だけが忌々しうに齒を喰ひしばつて、相かはらずの逞々しい日を消してゐた。

或夜、二人の者は、激しい勤めのあとで暫し目睡んでゐると同じやうな夢をみたのである——白い帆掛の小舟が一艘、沖の方から汀に漕ぎ寄せて來る、見ると紅の袴をつけた女房達が二三十人、鼓を打ち聲を調へて、萬の佛の願よりも、千年の誓ひたのもしき、架れたる草木も忽ちに、花さき

實のるところ聞け」と繰返して三遍、歌ひ澄して振消すやうに失せて行つた。……覺めてから、二人は自己の願望の達し得られる吉兆にちがひないと、互に手を取りあつて悦んだ。それからますます信心を固め、ひたむきの精進を勵んだのであつた。そして康頼の發起で、千本の卒都婆流しの企てが立てられた。薩摩方沖の小島にわれありと親には告げよ八重の潮風、思ひやれしばと思ふ旅だにも猶古里は戀しきものを」この二首の歌の下に、年號月日姓名を記し添へて、せめて千本のうちの一本でも都人の眼に觸れたなら、と二人は次々と出来る卒都婆を浦邊に持出して、祈念を籠めて寄せては返す白浪に投じ入れたのである。

治承二年の秋のはじめ、清盛入道相國の赦文を携へた使者丹左衛門尉基康の一行は、難航に目を遅らせた恨みをかこちながら、やつと鬼界が島に辿りついた。島に上

ると早速、都の御方はいづれに、都の御方はいづれに。」と隊を分けての搜索がはじまつた。ちやうど例の岩蔭の住ひで二人の熊野詣の留守にたゞひとり、無情な天を仰いで吐息してゐた俊寛の耳に、その探ね人の透つた音響が入つて來たのはその日の暮れ方であつた。あまりといへば夢のやう……恐らく天魔波旬のわが心を誑さうとするのであらう、と二度、三度、俊寛は疑つてみたが、隣はまぎれてもない片時も胸から離れぬ都訛りの懐しいひびきを傳へてゐる。あわてふためき、走る共なく、倒るゝ共なく、急ぎ御使の前に出ると、「私こそは流人俊寛でござります。」さう息せき切つて言上したまま、その場に泣き臥した。すると役人の一人は頭に懸けた布袋から、しづと入道相國の赦文を取出し奉つたが、開いて見ると、流人歸洛の命の下に、成経、康頼の名は連なつてゐるが、俊寛の名は書かれてゐない。禮紙にあらうかと、

禮紙を見たがな。さてまた、都から言傳てた數多の文の中にでも或は俊寛に關して一條があるかも知れぬと、いろいろさぐつてみたが單なる機嫌伺ひの文にさへ、一向俊寛だけが忘れられてゐる。望みは絶たれた。情に於ては忍びないが清盛の命、使者の基康はいつ時も早く俊寛を振放さうと焦つた。しかし俊寛は基康の手をとり、「そもそも我等三人は同じ罪、配所も同じところ故、どうして赦免のとき二人は召し返されて、一人だけを爰に残すのでござりませうか。相國殿の思ひ忘れか、執筆の謬りか、何卒御慈悲を以て歸洛の仲間にお加へ下さりませ。」

と身も世もあらぬ様で頼みこむのであつた。——が、従てはどう變へやうもない。狂氣した俊寛は船の轅にしがみついたまま、「日來の情を何となさる、御兩所までも私を見捨てなさるか、都までの同道かはぬとならせめて九州の地までも共に」と

掻口説いて、兩の手をゆるめようとせな
んだ。使者の基康は今はいまだと、俊寛
の焼きつくやうな眼差を反らしながら、雑
役に命じて鬻をぶつつり断たすと後をも
顧みず、白波蹴つて沖へ沖へと船を走らせ
てしまふた。あとには俊寛たゞひとり、切
れた綱を握んだきり、七生までも祟つてこ
の恨みを晴さんといふ形相物凄く、汀に轉
々のたうちまはつてをつた。……

さて、京の都に有王と申す稚いときから
俊寛僧都に不便がられて召使はれてゐた童
子があつた。鬼界が島の流人達が、都にの
ぼると聞いたので、わざわざ鳥羽まで出迎
へにまゐつたところ、主人の僧都の姿が見
えない。人に聞くと一人島に残されたとの
こと。さてこそ情ないことよと思つて、僧
都の姫御前のかくれて住まふところに忍ん
で昔の恩に報いたいこゝろを披瀝し、ひと
り鬼界が島を訪れる決心をしたのである。
三月の末に都を立つて、いよいよ有王は

遠い旅路を辿つた。幾多の艱難に遇うたが
主戀しさの一念が勝つて、長い日數を経た
あとに漸く目的の地に足を踏み入れた。著
いてみれば、都できいた流地のさまは事の
數でない、——田畑らしいものもあまりな
く、村らしい影もなく、行づりに會ふ鳥び
とはあつてもとんと言葉が通じないのであ
つた。が、有王は失望しなかつた。

「俊寛僧都をおたづね申す、法勝寺の執行
をおたづね致す」かう聲のかぎりに呼んだ
なら、どこからか「我こそは」と主人のあ
らはれ來ることもあらうと、島の中を隈な
く叫びつづけて歩いた。山の方の覺束ない
路に分け入り、嶺に攀ぢ、谷に下り、また
千鳥啼く海邊をしきりに尋ねまはつてみ
た。と、或朝、髪は茫々と生ひしげり、身
のぼろ布には藻屑を取りつけ、片手に荒海
布を、片手に貰うた魚を持った瘦せ衰へた
乞食のよろめき歩いて來るのに出會つた。
有王は佛家の語る餓鬼道をまざまざと見る
思ひがしたがもしやかうした非人の口から

主人の所在を知り得たならと思ひ返して、
「都よりの流人の一名、俊寛僧都を御存じ
ないか」と訊ねた。すると乞食は、一寸、
ためらふさまをして聞き耳を立てた。そこ
で有王は再びゆつくりと言葉を繰返した。
……手にしたものを投げすてて、穴のあく
ほど有王の顔を見つめてをつたが乞食の兩
眼がやがて堰きあがる涙にかき曇つて、ど
うとばかりにその砂のうへに全身を倒し
たのはそれから一分と經たぬうちである。
さてはこれこそ主の君かと、有王は膝のう
へに倒れたからだを抱き寄せ、
「おなつかしうござります」と云つたまま、
つづける言葉も見出せなかつた。
「さて、岩陰の庵に戻つた主従二人の話は、
それからそれへと盡きなかつたが、無情の
世を悟つた俊寛は自ら食事を留め、偏に彌
陀の名號を唱へ、臨終正念を祈られるので
あつた。有王がこの島に渡つて二十三日
目、遂に俊寛は庵の中に大往生を遂げたの
だつた。……」

果心居士

・ 大 人 の 讀 む 童 話 と し て ・

下 村 悦 夫
中 島 松 二

絵

作



第一章

まッ黒な、人の山だつた。さうして、それらの人々の視線の注がれてゐるところには、一本の杉の大木をうしろにして佇つてゐる、銀のやうな白髪（はくぱつ）の老人と、その老人が杉の枝に懸けた、大幅の地獄繪とがあつた。

老人は——さうだ、この、鶴のやうに清らかに痩せて、而も、どことなく冒しがたい威嚴のある老人は、先程から人々に、因果應報の理を説いてゐたのである。

水を打つたやうにしんと静まつて、咳一つする者もない。時々聞えるのは人々の頭上を壓し聳え立つてゐる杉の大木の葉隠れに鳴く鳥の音だけだ。その静けさの中に、よく冴えた老人の聲が響く。深山の僧堂に開かれた法座——といった形である。

『さて、皆の衆』

やがて、じゅん／＼と説き終つた老人は細いけれど首のやうに煌りと光る眼で聴衆をち／＼と見渡してから、壯重な口調で以て言葉を繼いだ。

『先刻からの儂の説話は、よおくお解りになつた事と思ふ。

即ち、この世の中の一切、因あれば必ず果あり——ぢや。よい種子にはよい果が實る。悪い種子には悪い果が實る。悪事

をすればその結果として己れが苦しむ。いや、それは當にこの現世だけではない、死んでからの後も——、よく見さつしやれ、ソレ、この繪にあるやうな地獄に墮ちて、永く苦しまねばなりませんのぢや、恐ろしい目にあはされますのぢや』さう云つて、奇妙に思はれるほど細くて長い老人の指が、はじめ、傍らの地獄繪を差した。聴衆の眼は吸ひ寄せられたやうに地獄繪に寄る——

『よいか、よおく見さつしやれよ』

老人の聲は一段と冴えて、

『これを事實に例へて云ひますればぢや、ウン、さう／＼、この城下の御大將織田信長公にしてからが、坊主が嫌ひぢやからとあるだけで、比叡山の寺を焼いたり、多くの僧侶を殺したりなされたのぢやで、必ず、疊の上での大往生は遂げられますまい。惡因——惡果何としても、人間らしい、良い死様はなさらぬにきまつてゐますぢや。信長公、武將としてはなか／＼偉いお方ではござらつしやるがな』遠慮も會釋も無い、實に大膽とも大膽な放言だつた。いかに町端れとはいひながら、こゝも矢張り、安土の城下の一部分だ。それなのに、例を引くに事を缺いて、領主信長を拉し來つて、その最後に就いて不吉な豫言を下したのである。——耳を澄まして聴聞してゐた人々のなかでは、呆れて、驚いて

或ひは怖れて、思はず、顔いろを變へた者もあつた。

だが、老人は、委細構はず、語り續けて、

「そこでぢや、信長公は氣の毒ながら良い御最後は送げられぬのみならず、死ねば、必ず、地獄へ墮ちなさるにきまつてゐる。地獄といふのは——、見さつしやれ、ソレ、このやうなものなのぢや」

聲と共に、老人の手が、極彩色の地獄繪の上を颯ツと一回轉した。

すると——、これは亦なシたる不思議！その大幅の裡に描れてある事々物々が、一切合財、恰かも今まで一時休止してゐたのが再び甦つたかのやうに、ざわざわツと動き出したのである。

針の山に尖り立つてゐる無數の針は、ギラ／＼と銀いろに輝きはじめる。鬼どもに迫立てられてその山へ登る亡者たちの足の裏からは、ボタリ／＼と血が滴り落ちる。血の池に湛えひろがつてゐる鮮血は、物凄くいほど赤い色の波を上げる。獄卒——赤

鬼や青鬼らに舌を引き抜かれる亡者どもは、眞蒼な顔をして、ひいツ／＼と泣き叫ぶ。轆轤の下からは、みり／＼ツと骨が折れ碎ける音と共に、泉のやうに血が噴き出す。さうして、それら阿鼻叫喚の錯綜する巷から冷たく、腥い風が渦巻きあがる……

活地獄が目の前に現出したのだ。人々は、ちーツとそれに見入りながら、あツと叫ぶ者もあれば、ぶる／＼ツと顫え出す者もあり、中には、兩手で目を

蔽ふ者もあつた。

「地獄とはこのやうなものぢや。皆の衆、決して悪い事をしてはなりませんぞ」

見物を見渡しながら、老人の聲が響いた。

そこへ、城下見廻りの役人がやつて来て、老人の胸倉を掴んだ。

主君信長を罵るのは怪しからん——といふのである。

見物共はハツとなつた。途端、凄惨極る活地獄の光景はそれなり氷りついた様に休止して又もや元の一幅の地獄繪にもどつて了つた。老人はそれを巻きをさめながらにや／＼ツと役人を見た——。

第二章

役人からの報告を聞いた信長は、生きて動く地獄繪といふ——の



を、ひどく面白いことに思つた。早速、老人の手から取上げて、床に掛けさせた。だが、畫中の事物は信長や老臣たちの好奇に満ちた期待に反して少しも動き出さなかつた。金碧紅紫——古びて妙にくすみ沈んだ色彩が、いたづらに彼らの目を疲れさせるだけだつた。

そこで、信長は、老人を牢屋から引張り出させて、繪を動かすやうにせよ、と囑附けた。

すると、老人は、銀のやうな長髯をしごきながら、冷然と云ひ放つた。

『折角ぢやが、この繪は儼が動かしたのでござら
ンよ』

『なンと申す?!』

『この畫中のものがそれ／＼命を吹込まれたかのやうに動いた——と見た人たちは、この畫が示すところにその人たちの靈魂の感應があつて、そこに開かれた境地から心の眼でもつてさう見ましたのぢや。儼にこの繪のものを動かす力なんぞありますものか』

『黙れッ、確かに其方が動かしたといふではないかッ』

『ハハハ、これは無體な』



老人は軽く笑つて、薄蒼く牙えた額に早くも痙攣筋を現はした信長をチロリと見て、

『今も申す通りぢや。さほどまでに御覽なされたいのなら、貴殿御自身で見さつしやるがよい。ぢやが、それも至難しからう。即ち、孔夫子の言はれたが如く——心こゝにあらざれば見れども見えす——ぢや。この世の中の事が解らぬ人や、悪い事をする者には、この繪は少しも生きて來はしませんぢやろ』

今度は、面と對つての痛罵だつた。而も、それが、信長には、もう一つ、愚弄の意味にも聞き取れた。信長は赫ツとなつた。

『おのれツ、よくも予を罵つたなツ。許さぬツ。ソレ、この老爺を孔つて打つて打ちのめせ！』

烈火のやうな命令に、二人の家來が弓の折れを持つて猶豫なく老人を打ちに掛つた。

びゅーんー風を切つて左右から打ち下ろされた弓の折れが、老人の肩にびしツと鳴つた。と、目をつむつてゐる老人の鼻腔から、ぐツと長閑な鼾聲が起つた。

二度めを折つた。また、鼾聲が出た。

三度、四度、五度——、その都度、老人の鼾聲は高くなつた。さうして、打てば打つほど、愈々益々その度を加へて、終りには、雨霰と降りそそぐ鞭の下に、恍然と寢こけてしまつた。

『ややッ、これはどうじやッ?!』

さしもの信長も呆れ返つた——。

この、奇妙不可思議な老人は、その場から再び牢屋へ投げ込まれたまふま、三日三夜、ぐう／＼と眠り續けた。役人や牢番たちも、たゞ／＼呆れ返るだけだつた。

老人は、四日めの朝になつて、漸とでその長い眠りから起き上つた。さうして、その様子を見に來た牢番と顔を見合せると、ゆつたりと伸びをしたあとで、

『あゝ、よう眠つたぞ。これで、もう、一月ぐらゐは寢ずとも済むわい、あツはツは』

快然と打ち笑つた——かと思ふと、忽ち、ふツと姿を消した。牢番は、我とわが目を疑ふやうに、兩眼を烈しくこすつた。だが、見えたのは、かの奇怪とも不思議ともいへる地獄繪の軸が、灰いろの壁に、いんと垂れ下つてゐる——それだけで、老人の姿は最早やそこになかつた。

第三章

『狐か大神使ひの老爺が逃げた!』

『切支丹伴天連の魔法使ひが逃げ失せた!』

城内も城下も大騒ぎになつたのは、茲に改めて云ふまでもないことである。

召捕の役人や武士が八方に飛んだ。

そのうちに、老人の探索に出掛けてゐた者の中の一人で、横溝半兵衛といふ勇士が、とある酒屋の店頭で徳利を枕にして悠々閑々と眠つてゐる老人を發見した。

拔足差足で忍び寄りさま——えい！

半兵衛は拔打ちに老人の首へ斬りつけた。

ごろり！ 首は地上へころげ落ちた。

『メめたッ、魔もののやうなこの老爺も、寝てゐるところを討たれては、得意の妖術も施すに暇なし！ か。ふふふ、巧くいつたぞ』

半兵衛は、その首を片手に提げて、急ぎ足に歩き出した。彼の行

先——安土の城内には、莫大な恩賞が彼を待つてゐる筈であつた。

ところが——、ところがである。その酒屋から二三丁ばかり來た

居時だつた。突然、うしろで、

わはははッ……といふ、朗らかな笑聲が、まるで天から降つてで

士も來たかのやうに響いたので、半兵衛何か知らずハツとして振返つ

て見ると、おゝ、これはそも何たる不思議ぞ！ 確かに一刀の下に斬

り殺した筈のかの怪しき老人が、そこに、鶴のやうな瘦軀清らかに

ニコ／＼しながら立つてゐるのだ。

『あゝッ、こゝこれはッ……！』

半兵衛は驚き慌てながら、先程討落して今なほ自分が片手に提げ

てゐる首——を見た。と、どうだらう、それは、老人が枕にしてゐ

た、あの酒徳利なのであつた。

老人が云つた。

『わしを殺さうなどとは以ての外ぢや。何人と雖も、わしを死なせ

ることは斷じて出來ン。焼かうが煮やうが、突かうが斬らうが、わ

しは決して死なンのぢや。といふ意味は、このわしが、人間の踏む

べきまことを體顯してゐるから——、まことこそいつまでも生きて

輝くものぢやから——と申すのぢや。ハハハ、どうぢや、解つたか

な？ 半兵衛殿、横溝氏』

いつの間に知つたのか、半兵衛の姓名をさへ口に出して云ふ老人

だつた。

半兵衛は、頓には言葉も出なかつた——。

……

織田信長が、幕下の智將明智日向守光秀のために弑せられたのは

安土城下にかうした騒ぎがあつてから、三ヶ月ほど後のことであつ

た。光秀に不意を撃たれて京都本能寺の朝露と消えた武將信長の臨

終は、この怪老人の豫言にたがはず、實に悲惨そのものだつた——。

第四章

瘦軀白鬚の老人が信長の死を豫言した——この噂は、すでににして

叛將光秀の耳にも傳はつた。彼は、或日、折りから京都に現れて辻

々で説教してゐた老人を、家來をつかはして邸へ呼んだ。自分の今

後の運命はどうであるか？ それを豫言して貰ひたい氣の動いた光

秀だつた。

老人は、招かるゝがまゝに飄々然とやつて來た。學者で、謹嚴で何事にも慎重な光秀は、五六人の老臣と共に禮を厚うして出迎へて風雅な閑室に案内した。

珍奇な菓子や果物や、茶の饗應があつてから、いよく、話が始まつた。光秀は、老人に、拙者の前途に就いて豫言して頂きたいと申出た。

果

「折角のお尋ねぢや、申しませう、遠慮の無いところをば、な」
老人の奇妙に細長い指が、胸のあたりまで房々と垂れてゐる白銀のやうな長髯をしづかにしごいた。それは老人が屹ツとなる時の癖

心

——らしかつた。

居

「トシとよろしうござりませんぞ。凶も凶、大凶！ですぢや。如何なる理由があつたにせよ、亦、如何に立腹なされたにせよ、臣たる身で主君を討ち奉つたお身様は、天人ともに許さぬ、無道至極の大悪人ぢや。そのお身様がこののち榮えやう筈はない！失禮ぢやが、

士

お身様の天下は短い！それに、信長公といづれ劣らぬ無慙な死様をなさるであらうのも、このわしの目にはあり／＼と見える！身から出た錆びと申すか、お氣の毒ぢやが仕方がござらん」

齒に衣被せぬ直言だつた。

聞終つた老臣どもの或る者の面上には、隠し切れぬ不快の色が、翻くらごめき或者は唇を蒼くした。或者は、寂しさうに吐息を吐

いた……。

有理だ！まづそれに相違あるまい！

光秀はさう思つた。胸を刺されたやうな心地がした。いつ知らず彼の眉も曇つてゐた。

「かたぢけない、お言葉、肝に銘じ申した」

光秀は會釋をした。しかし、さう云ひながらも心の中では、（この席上で云ふのはまだしも、斯様なことを世上に出て云ひ囁かれては、わが信望にも關れば、家臣どもの士氣が坦喪する因ともなる。可哀さうぢやが、このまゝ生かしてこゝからは出せぬ老爺ぢや。斬つてしまはう！）

と、早くも殺害の肚を決め、老臣の一人に向つて、そツとその意味を目配せした。

老臣は、光秀の目の中を覗き込んで頷くと、何氣無い顔で席を外した。

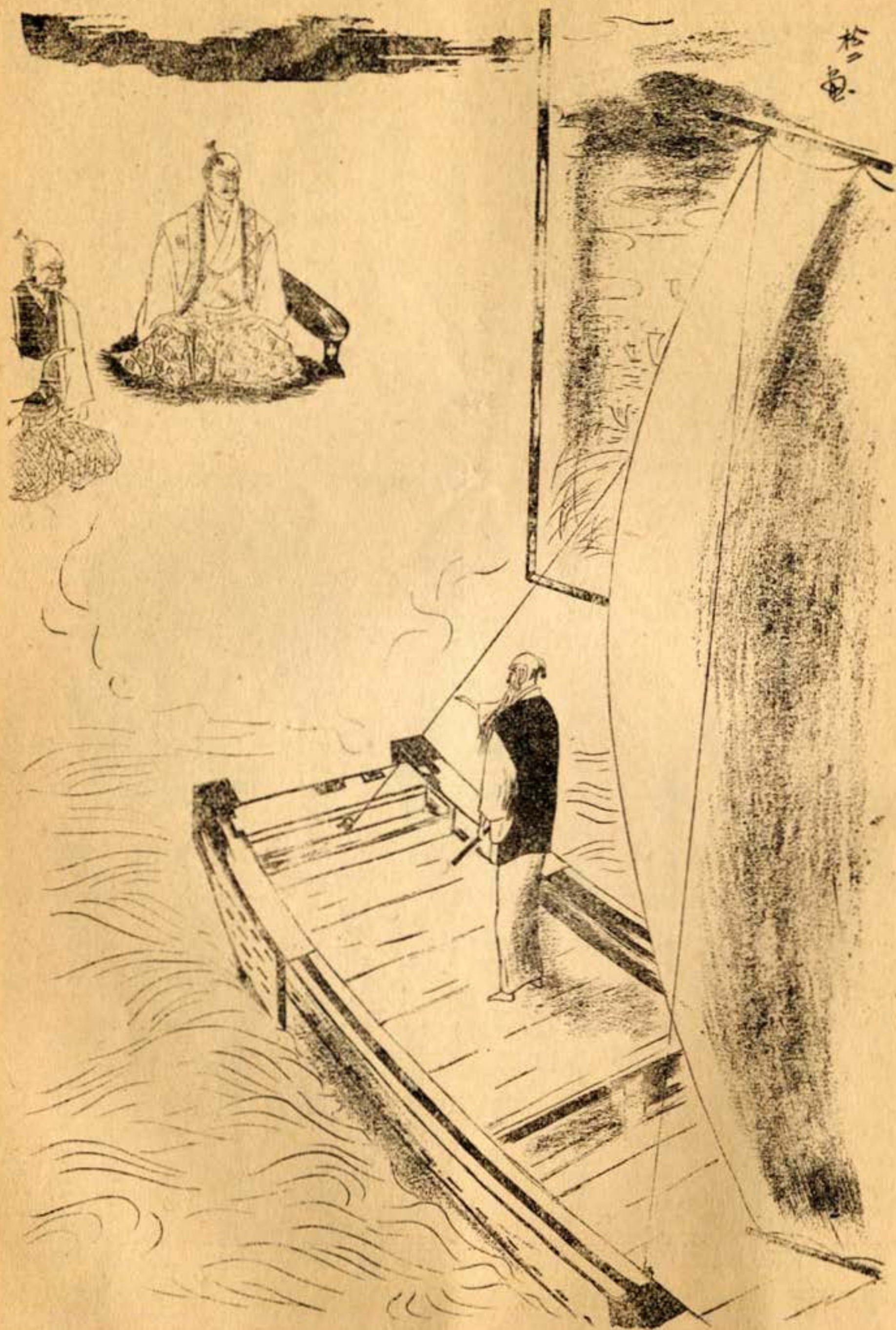
ところが――

さうした主従の險惡な目配せをば、この席の何人にも覺られずじ下界を照らす月のやうに靜かに且つ、超然として見てゐたのが、老人の眠さうな細い眼だつた。老人は、ははあ！と思つた。さう思ふと、自然に軽い笑ひが出た。

「なほ一言申上げる」

老人はしげ／＼と光秀を見ながら云つた、

松
島



「お身様は今ひどく焦つてゐなさる。焦つては事を仕損じますぞ。尤も、おのが心に咎めるやうな悪事をした者には、必然に焦りが出る。その焦りはやがて狂ひになるのぢや。それに引代へ、善人はつねにゆつたりとしてゐるものでござるが喃う。——あゝ、お身様といふ仁は、かさね々々お氣の毒ぢやてな、はッはッはッ」

終りは、餘り氣の毒さうにもない大笑だつた。

(この老爺め、おれを嘲るつもりなのか?)

光秀には、老人の大笑の意味は解らなかつた。

第五章

「さて、色々とお待遇に預つて、この老爺め、近頃になく極楽でござりましたぢや」

老人が、また、光秀に云つた。

「そこで、そのお禮——と申しては如何ぢやが、少しばかり面白いことをして御覽に入れようと思ひますのぢや」

「ほう、面白いことと云はれると?」

「見てゐさつしやい」

老人は靜かに立上つて、彼の横手に立てゝある、金地に近江八景を揮毫した、豪華燦爛たる屏風の前に歩み寄つた。

何を見せるといふのであらう? 光秀らの好奇心に輝く眼は、瞬

きもしずに、老人の一舉手一投足を見守つた。

と、今になつて漸くその鋭い輝きを現はした老人の兩眼が、八景のうちの、矢走ノ歸帆——のところに屹ツと据はつたかと思れば、眼を散らしたやうに點々とそこに描かれた、數十艘の舟のうちの一艘に向つて、

「おーい、その舟、まゐれーッ」

と、呼び掛けると共に、持つてゐた扇子をば颯ツとひらいて麾ねいた。

(畫中の舟を呼ぶ! 一休和尚の如き大徳ですらも、畫中の猛虎を縛れと云はれた時には、その機智を働かせ、縛るから先づ追出して呉れ——と云つて巧みに逃げを打つたと傳へられてゐるに、況んやこの老爺などが何として……)

さう思つて、光秀は微笑した。しかし、彼の目は、屏風の面から離れなかつた。

と、老人が、光秀に後ろを見せたまゝで、笑ひを含んだ聲で云つた。

「一休和尚のは禪機、わしのは術ぢや、ソレ、よおく見ゐなされよ」

光秀は悸ツとした。それとは一言も口に出さなかつたのに、早くもこの自分の心を讀みをつたとは、この老爺、噂よりも傑物らしいぞ!と思つたのである。

——途端 光秀も、老臣共も、思はず知らずあツと叫んだ。老人

に麾ねかれた畫中の舟が、すーッすーッと動き出したのだ。夕日を
受けて白帆が光る。帆桁が鳴る。舟人の聲が聞える——

『やゝッ、ここれはッ……』

光秀たちは驚いて腰を浮かせた。

正しく、老人の招きに應じた舟だつた。光秀主従の驚愕の叫びの
中に、ぐん／＼と近寄つて来て、つひには、實物の舟ほどの大きさ
になり、船首を屏風からぐーッとはみ出した。

帆のはためく音がした。

水の匂ひが鼻を打つた。

葦切りの鳴く聲さへもした——。

と、老人は、ヒラリとその舟へ飛び乗つた。

『急いで歸れーッ』

老人の手が再び舉つた。

と見る——

舟は又もやすーッ／＼と屏風の中へ戻りはじ
めた。その速度は最初夕日に舞ひ落ちる鳥ぐら
ひの速さ——だと思つたが、轉瞬、渦に吸ひ込
まれる枯葉のやうな速さに變つて、見る／＼う
ちに、元のやうに小さくなつた——かと思ふと、
舟の上にゐた老人の姿がバツと消え失せて、ど
こかで、あはははは……と打ち笑ふ聲が聞えた。



ノ—シンのいいところは
服む……スツと痛みが消える
同時に、頭の疲れを恢復する
……この二つです
而かも胃腸等には勿論、安全
で、連用すれば頭腦ばかりか、
心臓迄も強補する効果あり。
これでこそ完成せる模範的頭
腦藥と稱せられる所以ノ

頭の痛みと疲れに



三錢・五錢・一圓・二圓

『しまつたッ、逃げられたぞッ』
光秀は無念さうに空を睨んだ。

——屏風の繪は依然として靜かであつた。數十艘の矢走の歸帆は
おの／＼、描かれた場所にちツとしてゐた。

『うーむ、これはどうぢやッ……』

老臣共もへた／＼と座つてしまつた……。

——この神出鬼没にして變幻極りなき摩訶不思議の老人は、自ら
果心居士と稱した、當時に於ける日本隨一の忍術の大達人、世道人
心を戒めながら諸國を遍歴した人である——と傳へられてゐる。

(完)



手越の里の白拍子

山田 顯達

「久しからぬ」ものたへとまでせられた平家興亡の顛末は、流石に尙ほ後の世の我等が涙をさへ覺えしむるにふさはしい、一卷の哀史であつた。かつては入日さへ招かんずる一門の榮華の夢も、吹きくるふ櫻吹雪と共にやがては散り果つべき運命のものであつた。昨夜高樓の宴に酔ひしれしめた青海波は、今日、西海の波間に漂ふ、死の歌舞と變じ去つた。

悲運は、壇の浦に洗んだ武士たちの身の上

ばかりではなかつた。残された妻子たちは、更に不幸であつた。名だたる一門の末は、多くは探し求められて命を奪はれ、或は世に住ふべき所を失つたのであつた。平氏にゆかりありとだけで、人々は身も世もせまくひそみかくれねばならなかつた。いや／＼、悲惨はもつとはげしくさへあつた。昨日までの麗人貴人たちが、うらぶれて巷の蔭に、或は食を乞ふ群と變じ、或は妾と贖はれ、下婢に身をやつし、更には夜にまぎれて媚を賣るいやし

まぢり。い生涯にさへおちて行つた。

手越平太家綱とその二女たちの行末も、その例に洩るべくもなかつた。一門の没落の後、彼は漸くその二女を伴つて、遠く駿河國安倍川の邊、手越の里に逃れ來て、匿れ住ぶ身の上とはなつた。もとより、何程の家財をたづさへることが出來やうか。いまは、僅かに紙鳶の畫などを書いては、朝夕の炊煙の費に代ふる有様となりはてた。それすらも、二女をかかへては、日々窮乏に細りゆかねばならなかつたのも、無理からぬ。

それが戦亂に敗れたる武士の辿るべき運命であつたのだ。そこで、やむなくも、女たちが處女の泪を白粉にかくす白拍子の一人となつたのである。妹は一説に依ると、名を千手（一に千壽に作る）と云つて、かの平重衡に侍つて、琵琶や琴などを弾じては、その短い幽囚の月日を慰め、彼の死後は尼になつたとも云はれるが、又一説には、これが、後の大磯の白拍子・虎御前であるともいふ。この方が年齡上相應しいらしい。虎御前と曾我

十郎祐成との哀戀のほどは、ここに記すべくもない。しかし、そこには尙ほ、この永い復讐譚をめぐつての、この二姉妹の奇しき因縁が存したのである。

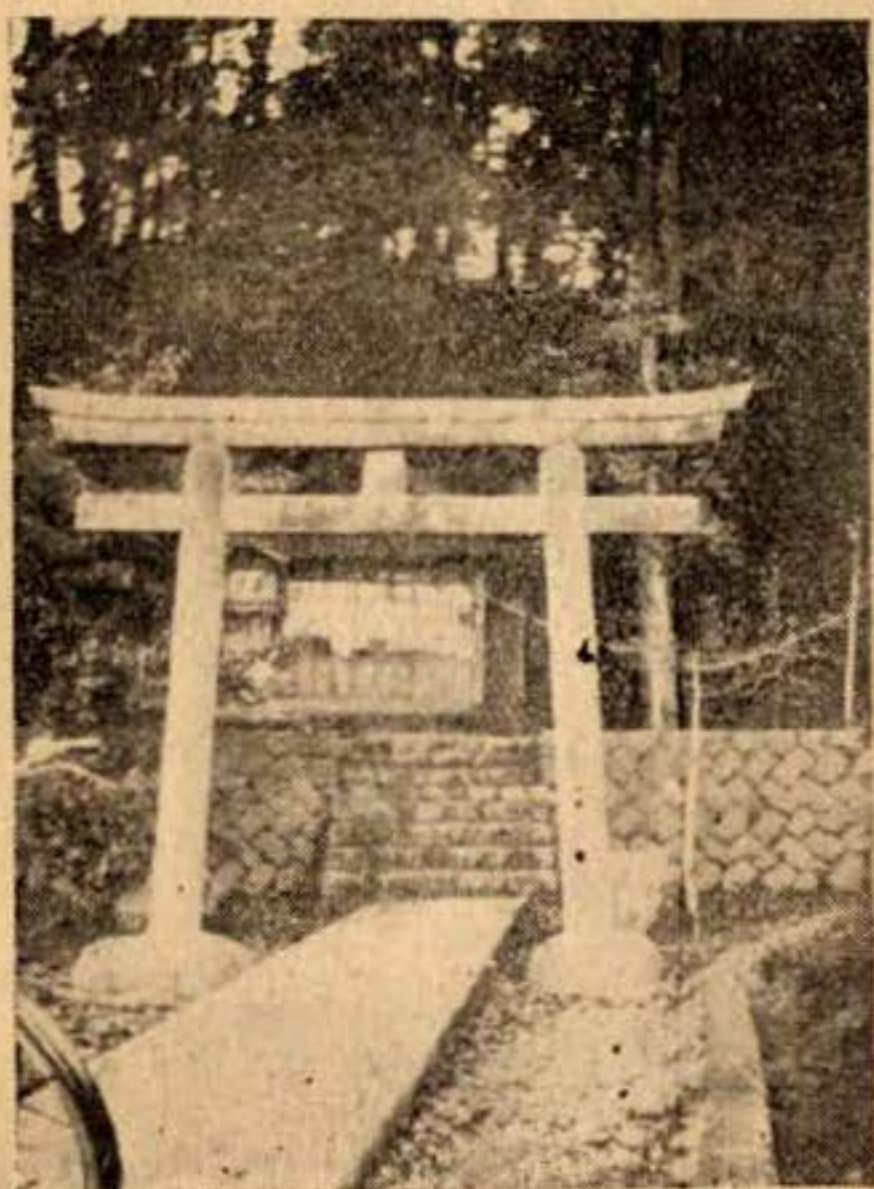
彼等の父、手越平太家綱は、落ぶれて後、常に平家の滅亡を慨いては、この姉妹たちに向つて、「頼朝は吾が敵であり、また不具戴天の讐なのだ。お前達二人も、出来たら何とかして頼朝に近づき時機を伺つて彼を刺せ」と語つたといふ。如何に戦國の習ひとは言へ一門の惨めな末路を見ては、やがてそれが恨みと凝つて頼朝一人に向けられたとしても不思議はなかつた。その娘たちが、蔭に日向に曾我兄弟に力して頼朝に一鼻あかしたといふのも、強ち無理な傳承の脚色ではあるまい。

私はこの姉について若干の物語を語ることにしよう。

姉は名を少將と呼ばれた。もとより都に育つた身であつたから、立居振舞も言葉遣ひも

鄙には見られぬ優雅さを具へ、容姿も麗しく音吐は朗暢で絃歌舞踏も巧みであつたに違ひない。この少將の白拍子姿を見て左衛門尉工藤祐經が、一目に激しい戀着を覺えたので

家綱及少將を合祀する手越町の少將塚



途路、彼は安倍川の邊り、手越の驛に宿して、一夜、旅情の徒然を慰めようと宿舎に白拍子を呼んで酒を酌んだのである。彼は、その白拍子の美しさに目を眩り、それは戀て愛着にかはつた。そして思はずも少將の手をとつて、「貴女はきつと由ある身の上であらう。どうしてかかる里の白拍子となられたか」と、その身の事情をやさしく尋ねたのであつた。すると少將は「國亡び家破れ身の寄邊もない」といつた身の上です。鎌倉は創業の新都ですからどうぞして鎌倉に往つて賤しい技でも習ひたいと思つて、父と一緒に此處まで参つたのですが、旅費もつきて、かうした身の土となつた」と、流石に涙ぐむのであつた。そこで祐經は、女の父にも金を與へ、少將の身を購つて之を鎌倉に伴ひ、その別室となしたといふのである。

やがて祐經に危難が、生長した曾我の二兄弟につけねられる危難が迫つて來た。巧みに頼朝の厚遇を受けた彼には、しかし、此

あつた。その時工藤祐經は、頼朝の驟起に従ひ之に仕へようと考へ、官を辭して都を去り東國へと向つたといふのだが、これはやゝ時日が喰違ひそうだ。兎に角、都から鎌倉への往返の途次にあつたといふ所であらう。その

護の勢力も強かつた。そこに二兄弟の苦心があつた。だが、このことは、物語るべくもあるまい。我々の興味は、少將と虎との二人の姉妹が敵味方別々の人の想ひ者となつてゐたことである。少將は、將して虎とその愛人との消息を知つて居つたであらうか。私はかやうに考へる。幼少にして悲運の波にもまれた此の姉妹は、必ずや互に結びついてゐたことであらう、必ずや互に頼り合ひ助け合つてゐたことであらう。たとへ敵味方と別れてゐやうとも。それに、姉妹は幼少から頼朝への反感を父や彼等の境遇から吹込まれてはゐなかつたか。まして虎と十郎が似合であつたらうのに反して、少將は年の違ふ祐經にどれ程深い愛情を有し得たかは疑問だ。彼女のやうな影倅な運命の女が、名聞利慾の心の猛き源家への狡猾漢、金で女の身を購つた年上に、どれ程の好意を持ち得やう。その上妹らの純情に對する姉としての温情——かうした心持は、反つて、曾我の二兄弟にこそ親しみを起させるであらう。兄弟を陣屋に導き入れた

内通の女が、この運命に居處を隔てたられた少將ではなかつたかと考へることは、更にこの物語りの綾に劇的な色彩を濃くする所以のものたるであらう。

ともあれ、建久四年五月、富士の牧狩の事變と共に、少將が再び安倍川の邊りに禍ひを避けて隠れひそんだ事情には、幕府に對するかやうな忌避も存したのではなからうか。そして、この少將の佗住居へと、死んだ十郎の靈を弔ふために尼となつた虎御前が、やがて訪ねて來た。變りはてた妹のその姿を見て少將も非常に感動させられた。金で購はれた間とは言へ、永年仕へた男を自ら手引して打たせた成行——女の身の、それが勢一杯の反幕の行爲ではあつたが——、それは、流石に此の世の惨めさ、淺間しき、果敢なさを想はせざるを得ぬ事柄であつた。手越の少將も、虎に倣つて、花の衣を脱ぎ捨てて世を忘れ果てた墨染の衣をば纏ふ身とはなつた。時に二十七であるといふ。

それから暫く立つ。元久二年秋、吉水の御

房に法然上人の説法を聴聞する尼女房たちに混つてかしこまる二人の若い旅姿の尼があつた。それは、あれから諸國を經巡つて由緒ある神社佛閣に參詣しては、恩讐二つながらの冥福を祈つて歩いた、手越の少將と虎御前との、昔にかはる姿であつた。二人は、遍歴の間中ずつと聞かされ通してあつた、法然上人の新宗教を慕つて、いま、その法廷に參じたのであつた。この新しい宗教は、この世の惨酷に押しひしがれた心を、この世の不幸に泣きあぐねた心を、女人も罪人も不具者も全て洩らすことなく救ひ取つてくれるといふのである。それは全く天來の福音であり、旱天の晴雨であつた。

今日も、上人は、罪深い女人も念佛さへ申せば極樂へ參れるといふのは本當でせうか、といふ女人たちの間に答へて話されるのであつた。

「大經には十八願といふ有難い如來の本願が説かれてあつて、たとへ一聲十聲でも、眞心こめて淨土に參りたいと願つてお念佛を唱へ



少將の草庵跡よ手越町安倍川を望む

さへすれば、必ず救ふとは言はれてゐます。然し、女人は障りが重く疑心が深い爲めに、悲しい哉、兩足はあり乍ら登り得ぬ法の峰、踏み得ぬ佛教の庭があり、恥しい哉、兩眼明らかなのに、見得ぬ靈地、拜せぬ靈像があるのです。此の娑婆世界の瓦礫荆棘の山、泥木素像の佛すら、女人には障りありとして許され

ない。況してや、衆寶合成の淨土、萬德究竟の佛に於ては、尙更と考へられるでせう。往生を疑はれるのも無理はありませぬ。それで別に第三十五の本願を立てられて、女人往生を許されてゐるのです。支那の善導大師も、この願を平釋して、彌陀の大願力に依つて、女人も佛の名號を稱すれば命終の時に女身を轉じて男子となることを得て、佛菩薩に迎へられて往生して、眞實の道理を悟ることが出来る。一切の女人は、若し彌陀の本願力に依らないならば、永恒に、女身を轉ずることは出来ないのである、と言はれてゐます。この轉成男子といふことは、つまり、女人をも平等に救はせ給ふ、み佛の大慈悲の表現なのであります。まことに頼母しい忝けないきはみです。」

と、尙ほも續々、特に女人の爲に淨土の法門を説かれるのであつた。少將も虎も共にそれには涙をこぼしたことであつた。そして上人のみ弟子の一人となり、恩誓を超えたみ佛の慈光裡に稱名念佛にいそしむ身とはなつた

のであつた。それから、二人がどのやうに世を過し身を終つたかは、明らかでない。しかし、少將は、恐らく三度、手越の里に戻つて草庵を結び、念佛生活の中に六十餘年の生を終へたことであらう。今も、静岡市手越町に少將の庵の跡といはるるものが存する。少將塚もあつたといふことだが、遂には見出す由もなかつた。現にある少將社は、彼女の靈を父家綱の祠と合祀せるものであるとも傳へられる（現在の祭神は素戔雄尊並に稻田姫命）何れにせよ、ここに、我等は、父の誓を打ちし曾我兄弟の蔭にあつた二女性が、父の誓を打たざりし法然上人の教へに依て、究極は救はれるに至つた、奇しき一篇の物語りの片影を見出すことが出来る。吉水の流れは、ここ安倍河の一隅にも、遠く水脈をひいて、今に里人の心を洗ひ清むるものがある。

往生はよにやすけれとみな人の

まことのこゝろなくてこそせね

大願成就・二十九年の大精進

百萬遍の名號を筆寫した話

— やればやれるの大不動心 —

瓜生天全

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……と足かけ二十九年間書きつゞけ、初一念貫徹にあらゆる障礙を突破、遂に念佛百萬遍の大悲願を達成して人々を驚嘆させてゐる人がある——戸畑市参宮通りに紙商を営む遠州こと原田三造さん（五十二歳）がその本人だが、話は三十餘年前に遡る——との書出しで、過ぐる四月十二日の大阪朝日新聞が三段ぬきの寫真入りで麗々しく發表したが、この燃ゆるが如き不屈不撓の信仰的聖業は社會をアツと驚歎させずにはおかなかつた。何と云ふ驚くべき信仰の力だらう。本誌でもまたとないこの信仰美談を是非とも『浄土』三萬の讀者に紹介したいと思つてゐた矢先、幸にも原田さんの教の父である九州の瓜生天全師が詳細にその全貌を書いてよこされた。聖業直接の指導者である瓜生氏の玉稿は原田さんの尊い生活を畫いて餘す所がない、佛恩を有難く感謝しながらこゝに掲載する。（一記者）

丁度日露戦争の最中であつた、關西に於ける六十餘日の傳道旅行が卒業試験となつて、長い間の宗門の學業を終へて、故郷の福岡縣遠賀郡香月村の光徳寺に歸つた。

私も若かつたが、將來を擔ふ青年に信仰心を振興させる事が最も大切であると痛感し、村の青年の教化に全勢力を傾けた。法話のあいま／＼には書道を教授したり、地文學を講じたりしたが、佛大の御加護か、宗祖の御恩徳か大いに成績が上り、十數名の青年達が念佛生活に喜んでいそしむやうになつた。その中でも原田三造さんと金田千太郎さんの二人は特に熱心で、書道も大いに上達し、阿彌陀佛への信仰も火と燃えさかつた。或る日、私は何の氣なしに、

『日本國中廣いとは雖も、今日迄、いまだかつて南無阿彌陀佛の六字の名號を百萬遍書き上げた者はない』

と所信を披露した。勿論、私のこの言葉は不意に出たものであつたが、信佛に燃えてゐた當時十七歳の三造少年の頭には強く響いたら

しい。

その後、私は現在の同郡所屋町の光明寺に轉住し、東奔西走の布教に精進して、アチコチに多くの同信の友を得たので、三造さん



原田三造さん
んと筆者の
百萬遍

の事

もとも

すれば忘れ

勝ちになつて

ゐた。その上あの

言葉がこんな大聖業を起させるとは考へもしなかつたから、三造さんとの文通もとだへてしまつて、三十年の年月が夢のやうに流れて

しまつた。

所が今年の四月に突然手紙が來て、その後の三造さんの尊い涙の出るやうな感激の信仰生活が判つた。即ち、名號百萬遍書寫完成の報告であつた。

「三十年前の上人のあの御教訓は一日たりとも忘れませんでした。總らゆる障礙を突破してこゝに名號百萬遍を書き上げまして、今はたゞ廣大な佛恩に感泣してゐます。これもひとへに御師の導きの賜です」

と書かれてゐる文面に至るや、私は喜びか驚きか判らないやうな不思議な氣持になつて、涙が頬を傳つて流れた。私の言葉がこんな大聖業を完成させたのか。いや／＼佛徳の力だ。三造さんの信仰の力だ。それにしても三十年の間この事を少しも知らなかつた私は何と云ふ不徳者であらう。許せない罪を犯したやうに思はれて非常に心苦しかつた。

私と交渉が切れてからの三造さんの生活を三造さん自らの手紙で語るとかうであつた。私のあの話を聞いた時に、三造さんの信仰

厚い而も感激多い少年の心は大いに躍つた。それから數年たつた明治四十一年の十二月二十五日、大聖樂の一筆が投ぜられた。この日は氏の誕生日でもあり、法然上人の御忌日でもあつたので、一念發起した三造さん——もうこの時は二十三歳の立派な青年だ——は家族以外の誰にも語らず、深夜コッソリと起き出て、巻紙をのべ、「一時三拜」して、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……」と最初の墨を下した。百萬遍大悲願が愈々始められたのである。

それから驚くべき精進の生活が続けられて行つた。多忙な生活に追はれてやゝもすると筆を投げたい氣にもなつた。怠惰心が頭を擡げる事も再三であつた。併し、三造さんの大不動心はビクともしなかつた。寸暇を盗んでは、阿彌陀佛の廣大な慈悲に感泣し、子孫は勿論一切衆生の後生樂土を願ひつゝ、名號の拜唱と書寫が進められた。

そして、二十九ヶ年の驚嘆すべき長い間に超人的な精進が続けられ、遂に本年の四月十

一日の夜半に、最後の六字が書かれたのであつた。前代未聞の大聖樂が完成されたのであつた。

卷數にして六十六卷、字數六百萬字、念佛回數が一文字三唱、従つて一千八百萬回、念佛文字の畫數で見ると四千八百萬畫、經卷を延長すれば二十二町におよび、文字を一行配列して二里十六町、一字づゝ配列すれば四里二十四町、一字々々の畫線を延長させると實に百三十八里、經卷が三尺二寸地のものが二千百十二枚、墨一丁半もの六十丁、毛筆が六百六十本、と云ふ超人的の記録で完成された。

完成の手紙を拜見するや、私は三造さんに是非とも會つて共に喜びたいと願つてゐたが去る五月十五日やつとその望を達した。約三十年ぶりの對面でお互に感慨無量であつた。特に六十六卷に收められた百萬遍の南無阿彌陀佛の神々しい筆跡を拜見しては、法悦の涙にむせばざるを得なかつた。佛壇に恭々しく回向して青年時代の追憶談に花を咲かせたが

三造さんの信仰談は殊に有難かつた。

「百萬遍の大業も幾度途中でザセツしようにしたか判りません。併し、その時きまつて胸に浮んでくるのは、貴方の御顔と御教訓でした。これではならぬと勇猛心を起して筆を運んで行きました。また或時、釋尊一代記を拜讀しましたが、あの御苦勞に比べると、これしきの苦勞は何でもない、私の心をはげました事もありました。自力、他力、これが渾然と一となつてこの大業を完成する事が出来たのです。私一箇の力ではありません。佛様の廣大な自利利他の御力によつて完成し得たのです。」

と語る三造さんの敬虔な言葉は神々しい音樂のやうに私の耳に響いた。

想へば二十九ヶ年、一心專念に唱名拜記せられたこの精進婆羅密の居士こそ、私達淨土門の模範であらう。聞く所によれば本年一杯は名號を書き續け、更に來年から觀音經の寫經に專念されとの事である。讀者と共にこの聖業成就を心から祝福して擲筆する。

大衆歌壇

與謝野晶子選

○ 山口 竹原 惠明

おろかなる弱きこの身も信ずれば菩薩のみ手につながれてけり
評 強き信念と優しき謙讓心の融和は此の一首の作に對してのみならず作者の全人格に合掌を送らしめる。

○ 長野 田中 廣司

ふりつづくさびしき雨に色染ま
であやめの花は紫に咲く
評 梅雨の中の鮮明なる菖蒲の色を云はれた、否見られたのを喜ぶ。

○ 大阪市 前中 漁洲

尼たちが經を誦しつつ鶏を飼ふ
長き一日の暮れんとすらん
評 尼寺の生活の長閑りさ、季は晩春初夏の永日

○ 廣島 上原 抱地

よもすがら水田の蛙啼きつづき
たゞ一聲す山ほととぎす

○ 石川 田中みち子

現實に泣きぬれたるは昨日なり
み佛を知りすべて足るかな

○ 滋賀 本間 秀道

世のにがく人のはかなくしみじ
みと慰めがたき年となりけり

○ 神戸 秋田 里次

色も香も十方佛に參らせんはか
なくつみし春草ながら

○ 新宮 奥村 映水

御佛の光の中と思へども逝きに
し友の悼まるゝかな

○ 長野 中山 弘

夏の來て木の一葉にも大いなる
力満ちたりまして人の子

○ 三重 大野 歩行

空のもと若葉の波のひろがりて
遠きにすなり荷車の音

○ 福島 村上 徳三

朝夕にわれ觀音を念じつつ強く
樂しく生きんとぞ思ふ

○ 東京 三野輪香雪

溪水の音をききつゝ夜の山いそ
ぎ下れば森に月出づ

○ 福島 佐藤末太郎

さすらひの旅にあらねど孤兒の
はかなさ覺ゆこの頃のわれ

○ 北海道 花田 順往

飽かずしもくりかへし啼く郭公
の聲の聞ゆるひるしづかなり

○ 静岡 一向 山人

薄雲のたなびくと見えし東の間
に見えずなりぬる富士の頂

○ 静岡 富岡 和人

日廻りの花のさがこそうれしけ
れめぐみに生くる人の身に似て

○ 埼玉 青野 智恵

頂きの眞白き雪も澄み渡る空を
映して青みたる山

○ 岩手 藤原貞二郎

もやこめし夏の朝よし露ふみて
心たのしく草刈に行く

○ 東京 陸奥 獨鈴

破れ鐘のつけどひびかぬ寂しさ
に似てわが心あはれなるかな

○ 東京 安良岡 昇

兵士らが馬つなぎたる松林いと
静かにて春の蟬鳴く

○ 小倉 益田 慧光

人相をわが撞ける時物くれて撞
かせよなどと云ひし友かな

○ 群馬 森原 菊子

はらからの人と成るころ父母の
老い給ふこそ悲しかりけれ

○ 海南 青木タケシ

父母をふるさとに置き國の爲め
遠く出で立つ兵に謝す

○ 三重 香住 紫精

あみだぶとみ聲をたのみひたす
らにすすむ心の我れうれしけれ

○ 大阪 藤田 齋然

村の内しづかに寂し人出でて田
植する日にわれひとり讀む

○ 宮崎 小野 靜枝

何故ぞやさしき父母のまします
にさびしく物を思ふ癖つく

どうよじのもどこ



仙人^{せん にん}から生^うれた

王子^{わう じ}の 話^{はなし}

佐藤^{さとう} 春夫^{はるお} 作^{さく}

青柳^{あおやなぎ} 喜兵衛^{きべゑ} 畫^え

むかし。まだお釋迦^{しやくか}さまがわれわれどもと同じこの世界^{せかい}に居^いらせられたところのことです。印度^{いんど}の或^{ある}ところのひとりの王^{わう}様があらましました。國^{くに}は榮^{さか}え、民^{たみ}も賑^{にぎ}はつて、お后^{きさき}もこの上^{うへ}ない方で、申^{まを}し分^わのないお身^みの上^{うへ}でしたのに、たつた一つのお不幸^{ふこう}にはもう大^{だい}ぶんお年^{とし}を召^めしたのにまだお世^よ繼^{つぎ}の王^{わう}子^こがゐらせられないのでした。晝^{ひる}も夜^よもこのことばかり御^ご心^{しん}配^{はい}なされて、ある時^{とき}この事^{こと}を人^{ひと}相^{あひま}見^みに占^{うら}はせますと、人^{ひと}相^{あひま}見^みの申^{まを}し上^あげますには、

「大^{だい}王^{わう}さま、決^{けつ}して決^{けつ}して御^ご心^{しん}配^{はい}なされるには及^{およ}びません。お世^よつ

ぎの王子にはある仙人が産れ代ることに御運命が決つて居られます。ただ、何に致しましても、仙人の事でございますからなかなか命が長うございます。それで王子もまだお産れにならせられぬ次第でございます。」

「それではその仙人の命のある間は、王子は産れないと申すのだな。困つたものである。私ももう年をとつてゐる。早く王子を見たいものである。もしわたしの壽命よりも、その仙人の壽命の方が永かつたなら、わたしは一生世つぎを見ないでこの世を去らなければならないのか」

「いやいや、決してそんな御心配は御無用かと存じ上げます。さすがの仙人の壽命とても、到底わが大王の御壽命になふわけはございませんで、近ごろではもう大ぶん元氣も衰へて参つて居りますから今にほどなく命が終つて王子にお産れ代りになることと存じ上げます。」

「その方がいいかげんな事を申すのではあるまいな。」

王様はおそろしい見幕で人相見を睨みつけたものでございます。

「はいはい。これは飛んでもないお言葉です。勿體なくも大王に向つて、何でいいかげんな事を申上げませうか。」

「さうか。それならば、その仙人といふのは今どこにゐるの

か、せめては、世つぎに生れ代るといふその仙人でも見たいものである」

「その仙人はここからさう遠いところでない。！かじか、これこれの山の洞のなかに居ります。後に王子に生れ代つて御不自由のない御身分になる埋め合せに只今では山の木の實を食べて命をつないで居りますが、季節柄、果物がよく實つてゐるのを少々いただきすぎて居ります」

「うむ。それではそれがもとで今に命が終るといふのだな」
人相見は王様のこの言葉にはお返事をしないで、この王様は立派なお情け深い方なのに、やがて自分のお世つぎに生れ代らうとしてゐる仙人の病氣を氣の毒に思ふどころか、それがもとで早く亡くなればいいやうなことを仰せられるのを聞いて、早くお世つぎが見たいばかりに、この話にかけては王様がまるでもののわからない無慈悲な方のやうになつてしまはれるのをお氣の毒に思ひながら御殿をさがりました。

王様は世つぎが全くないものと思つたらまたその氣であきらめる事も出来たのでせうが、必ずあると聞いては、一時も早も見たいといふお心持を押へることが出来ませんでした。今まで何事でもお心のままになさりつけてゐる王様のやうな身分では自分の欲を押へるといふことは人一倍むづかしい事

なのでございます。もともと決して悪い王様ではなかつたのに、この時悪心が起つて、家來の軍人をお召しになつて、人相見の話のとほりの洞のなかに本當に仙人があるかどうかをまづたしかめさせ、もう古い先き永くもない病氣の仙人を殺すことをお命じになつたものでした。この非道の酬ひは後になつて思ひ當ることがございます。

人相見の申した事は本當であつたものと見えまして、山の洞にはひとりの仙人がゐて、その仙人が王様の軍人に殺されて死にますとそれと同じところに王様のお后にお子さまがお生れになる御様子が見えはじめました。人相見の言葉がございますから、間違ひはないと思ひましたけれど、王様はやはり氣がかりでなりませんでしたからもう一度、同じ人相見をお呼びになつてお后のおなかのお子がお世つぎの王子に相違がないか、どんな王子がお産れになるかなどをお尋ねになりました。

「間違ひなく王子でございます。決してお姫さまではございせん。必ず立派な王子がお産れになります。ただこの王子は前の生で御不幸な一生を送られた事のある方で、それで父君をお怨みにお思ひになる事があるらしいでございます。多分お生れになるのもそのためにおそかつたものと存じ奉ります。それ故、お生れ遊ばして御成長の後に、父君に叛き奉るやうな事がなければよいかと恐れながらお安じ申し上げます」

「よし。その方には褒美の品を澤山とらせるぞ」

王様はごきげんよくかう申されましたが、お顔の色がすぐれさせないやうに拜せられました。人相見の申すことは外の人々には何のことやらわりませんでしたけれど、王様だけには思ひ當るところがあつたからでございます。王様はこの日からお喜びの日を待ちながら毎日王子の無かつた頃よりもつとふさぎ込んで居られるやうにお見受け申しましたので、お后さまも御心配申してお尋ね申し上げると、はじめは無事にお産がすめばいいとそれを心配して居られるとだけ申して居られましたか、おしまひに人相見のお話を打明けて王子が前生の怨みで王様に御謀叛を企てるであらうと申したのを心配して居らせられるとわかりました。お后にしたところで後に王様の敵となるやうな王子は産みたくないとお思ひになつたので、王様とも御相談の上で、お産をお城の高い櫓の上でなさることにおきめになりました。折角育てて悪いお子であつては情けないし、さうかといつて生れようとしてゐるお子を手をかけて殺してしまふほどむごい心持にはとてもなれないので、どうしたらいいのかわからないから、何もかも運に任せて高い櫓から下へ産み落して見ようといふつもりでした。尤もこの考へだけでもおそろしい事には違ひありませんでした。この酬ひも後に思ひ當ることがございます。

生れて王子は父君母君の呪ひを受けて居られましたがそれでもこ

の世に用事のある方であつたと見えて、高い櫓の上から生み落されながら、不思議と命には別條もなくお庭の柔かな草の上へやんわりと落ちて、落ちる時突いた手の指を一本折つただけで、元氣よく、オギア、オギア、オギアと泣いて居るのでした。さうしてその後、別に世の常の子供と違つたところもなく丈夫に成長してゐました。さうして何もかもむかしの事になつてしまつて、今はこの王子ももう二十に近くなりましたし、むかしからお年寄りであられた王様は益々お年を召されました。

話が變りましてここにお釋迦さまの從兄弟にあたる方にひとりあまり心がけのよくないダイバダツタといふ方がゐて、これがあの仙人の生れ變れの王子とお友達でし



た。

ダイバダツタは從兄弟のお釋迦さまが生き佛さまだといふのでお弟子たちの數も日に日に多くなつて大へん勢のいいのを嫉ましい事に思つて、それならば自分でもお釋迦さまのやうに修行をつんで徳の高い方にならうと心掛けたらよささうなものを、そこに氣のつかない困つた人でしたから、ここに一つ悪いたくらみ思ひついたものでした。それは日ごろ仲のいい友達の王子が早く王様になつてくれたらその勢を利用して自分もえらくなれるのだから、これは王子を早く王様にならせるに越したうまい考へはないといふので、王子に早く王様になれとすすめるのでした。王子は王様の位はお父さんから譲つていただくのだから自分で勝手になれるものではないとはじめのうちは相手になりませんでした

が、ダイバダツタはしまひに悪い大臣などをも仲間ひき入れて王子を悪いたくらみのなかへ引き入れて申しました。

「王子さま、あなたの前生は、あなたは御存知ありますまいがある立派な仙人であつしやつたのを今の父君のために殺されたのです。そればかりかあなたは生れる時にも死んでしまへばいいといふのでお父さまやお母さまが高い槽から下へ放り抛げたのに、後に僕の友人になつて僕の事業を助けなければならぬといふので天は君の命を助けたのです。天は君と僕とがいいお友達になつて天下を治めることを望んでゐるのですよ。ね、君がお父さまの代りになつて天下を治めて、僕は僕の従兄弟の代りになつて天下にいい宗教を弘めるのです。いい宗教は君の治めてゐる國のなかへ廣く行はれて、いい政治といい宗教とで天下に類のないいい國をこしらへるのが君と僕との天に對してしなければならぬ仕事なのだぜ。浮かうかしではゐられないではないか。君と僕とがこれをしなければ今日の世の中はどうにもならないのだからね。君の右の手の指が一本折れてゐるだらう。そらね、それが君が赤ちやんのころにお城の高い槽から落された時の怪我のためなのだよ。僕の知つてゐる人でそんな事を何もかもすつかり知つてゐる人がゐるのだ。いや、君のところの大臣だつてよく知つてゐるから僕のいふ事がうそだか本當だか聞いてごらん」

ダイバダツタはこんな事を言つて王子をそそのかしたものです。

悪いたくらみを持つた者はいつも口さきでは上手なことをいかにも尤もらしくいふので誰しもつひだまされるものです。それでも王子は自分のお父さまに謀反をして王様にならうといふやうな恐ろしい心にはなりませんでした。するとダイバダツタは

「だつて印度にはむかしからそんな王様の例は一萬八千もあるのだよ。ペーダ論といふむかしの本を読んでごらん。詳しく書いてあるからさ。」

「でも、僕にはそんな事は出来ないよ」

「さうかい。でもそれが人民のためなのだかな。大義親を滅すといふ古の聖人の教があるのを君知らないのかい。」

王子はたうとう悪友にそそのかされて、それでも父君のお命を取るなんて事は出来るものではないといふので、ただ父君を御殿の奥の間へしつかりと閉ぢ込めて無理に御隠居をさせておしまひになつて自分で勝手に王様になつてしまひました。この悪い王子は後には母上をさへ父上同様に御殿の奥へ封じ込めてしまひました。けれどもこの悪い王子のお母さまの後は信心深い方でしたからお釋迦が現はれて深切なお説教で阿彌陀様の極樂へ行けるやうにおさとし下さいました。この時お釋迦さまのお説教を書いたのが觀無量壽經といふお經です。

(をわり)



信 仰 相 談

擔 當 中 村 辨 康

本覽への投稿はハガキ
または封書にて、住所
氏名御明記の上信仰相
談係あてに送ること、

引導とは

(問) 葬儀の引導はどんな譯のあるもので御座いませうか、詳しくお教へ下さいまし。(奈良良迷信生)

(答) 葬儀の引導は下炬とも云つて、支那の希運禪師が母親の溺死した際に、炬を投じて法語を説いたのが始めて、其文句は「廣河源頭乾二徹底」是此五逆無所蔵、一子出家九族生天、若是妄語諸佛妄語」と云ふのだつたさうです。生前に佛道に入らなかつたのを悲しんで、せめてはと云ふ親子の眞情から出た事でせう。その事から各宗共に人生の四大儀禮の一つの葬儀の時に用ゐられる事になつたの

で、宗派宗派に依つて夫々特色があり異なつた意義が込められて居るのが、現在の引導です。浄土教の方では無論念佛中心に、引導の時も念佛の有難いはれを云つて十念で最後を結ぶのですが、古來から作法があつて三段に分けて佛語を引くのです。今ではさう云ふ文句を集めた本も出来て居ます。然し念佛中心ですから、阿波の介の念佛も法然上人の念佛も同じだと云ふ話もある通り、信仰の上では念佛に異りはありません。眞宗などでは別に引導の法語を用ゐずお念佛丈で葬儀をして居ます。委しい事は宗派の傳法上に耳りますので、公開することを禁じられて居ります爲に申上

げる事は出来ません。

一字一石

(問) 一字一石に就て學問的に信仰的に。寫經に就いて右同様視角から。(近藤正雄)

(答) 一字一石と云ふ事は天台宗などでやることで、法華經を一字づつ一石に書いて地中に埋め其上に塔を建てたり塚を築いたりする事を云ふので、浄土教系統にはない事ですから、よく存じません。學問的には無論意義はないでせう。法に對する信仰から來たものでせう。攝津の經の島は平清盛が經石を埋めて築いたものだ云ふ事で、多寶塔とか一字一石塔とか云ふものが各地に散在してあります。フエティシズムと云ふ呪物崇拜思想からも來て居るやうに存じられます。また寫經と云ふものも佛經

を尊崇護持するところから來たものだらうと存じますが、前の一字一石も寫經の一發展なのでせう。之も天台宗系統の重要な儀式になつて居ます。法然上人が後白河法皇の如法經の御儀式に導師をつとめられたと云ふ有名な話は既に御存じの事と思ひます。名古屋の伊藤さんでは何百年來頓寫法要と云ふものを毎年やつて居られるとか承りました。意義等に就いては一向存じません。天台宗の方に御訪ねになるのがよいと思ひます。

忌服の意味

(問) 新らしい佛が出来たら其の佛の墓丈に香華をそなへ、外の祖先の墓にはお参りが出来ないと申します。又忌明までは斷然お宮参りしたり、鳥井の下は通れないと申しますが、どう云

信 仰 相 談

ふ譯でせう。(鳥根 陸子)

(答) 新らしく亡くなられた方がありまして、祖先のお墓に詣ることはよい事で、祖先を大切にすることは我國に於ける最もよい美風の一つです。決して御遠慮なさいますな。

また忌と云ふことは原始的宗教の名残りで、支那の服即ち喪に服することに、日本在來の忌がくつついて忌服と云ふ習慣が出来ました。だから戒の事を忌事とも云ひ、正五九の三月を梵網經の三長齋月の意味で忌月とも云つて居ますが、タブーの信仰に似たものです。原始時代には此信仰も衛生的な効果が多分にあつたもので、死骸を穢れと見ることは當然な事ですから、其死骸に觸れる近親者が忌を守つたのも謂れのある良習慣だつたのです。然し今は醫學が發達して居ますから、死骸

や血に對する昔風の忌は意味をなさなくなつて居ます。だから消毒の行届いて居る今日では忌の間だつて外出が出来る譯で、もうそんな事はいらぬ譯ですが、御役所づとめの人や學校關係では忌の休みは休みの内に入れない便宜もありますし、香奠などのお返しをするにも便利ですし、亡き人に對する禮儀の上とか、追憶、悲歎の感情を靜める上とか色々の必要がありますから、忌と云ふことはあつてよい事だと存じます。然しお宮に御詣りが出来ないとか鳥居の下を通れないことなどは、もう意味をなさなくなりましたが、何も敢て人の機嫌を損する必要はないでせうから、其地方の習慣に従はれたらよいでせう。

尼になり度い

(問) 尼になりたいのですが、小學校卒業だけではなれませんでせうか。又兩親の許しがなければいけませんでせうか。兄弟がありながら、尼になるのはいけないでせうか。(青山 福田)

(問) およしなさいまし。尼さんになつたつて信仰がなければ駄目ですし、信仰があれば何も尼さんになる必要はありませんからです。無論小學校丈ではいけません。尼衆學校入學の資格は高等小學校卒業、年齢十五歳以上ですが、其前に師匠を得て得度しなければなりませんし、僧籍に編入しなければなりません。が、それには親の同意が必要です。次の御質問の兄弟の有無は問題ではありません。

追善の道

(問) 一錢地蔵の記事に依り今更愛別の悲しみに打たれ追憶の

念新たなるもの有之候、生死輪廻の巷に如何なる追善の道ありや、この尊き念佛の法を如何に回向すべきや、御教示被下度候、又回向文を掲げて下さい。未來世に理想をおく淨土教は如何に死後を示し給ふや。(神田 新田生)

(答) 淨土教は未來世ばかりを中心としては居りません。現在から未來永遠に通ずるもので、之を現當二世安樂と云つて居ります。現在に信仰を得て生命の問題が解決せらるれば、身體の存否は問題はなく、阿彌陀佛の大生命の中に大光明の中に生かされて居るだけなのです。此大信念の上に立つて、與へられたる當面の仕事に精進努力して行くだけなのです。實は死後が何うだの未來世が何うだのと云ふのは、つまらない取越苦勞なのです。また追善と云ふ

信 仰 相 談

事も一番重要なことは、自分が信仰に入ること、之れ有つて初めて本當の追善もあり、其意味も分つて來ます。さもない限り、たとへやつても小追善より出來はしません。また回向文などは何うでもよいではありませんか。一番よい回向文は南無阿彌陀佛なのです。尙ほ回向文の實例は六月號五十四頁にのせてありますから御覽下さい。

行詰り打開

(問) 世の中の一切の苦しみ、悲しみ、家庭の行詰り、社會の行詰り、國家の行詰りがどのやうにしたら愛の燈火に輝き照らされて打開の道が生ずるものでせうか。人類が永遠に生きる愛の力を得るには何うしたらよいのでせうか、合掌。(神奈川 梅澤生)

(答) 一言にして云へば自我に執着して居る人が一人も居ないやうにする事です。自我執着のある限り、苦みは去りません。悲しみは去りません。恨みは取れません。家庭が行詰り、國家が行詰り、世界が行詰つて來るのは、個人我、國家我、民族我が禍ひして居るからです。お互ひに我のつっぱり合ひをして居る限り、何處に本當の愛があるでせう。上邊ばかりの愛、御都合上の愛、そんなものがどうして全人類の上に幸福をもたらすでせう。よく世間では人類は一つの紐帶を持つて結び合つて居るのだから、共存共榮しなければならぬと、相互扶助を説きますが、自我を破つて居るぬ人の相互扶助など、何が本當の事が出来るものですか。世界に宗教も数が多いけれども、其點になると佛教以外皆な落第

です。と云ふのは佛教以外自我意識の上に立つ宗教ばかりだからです。自我意識に立つ限り行詰りの來るのは寧ろ當然で、今の處國で云へば日本以外、皆な滅亡へ急いで居る有様です。イタリイが日本の滿洲への眞似をしてエチオピアを取つたと云つてますが、何處に日本を眞似て居りますか。日本では虐げられて居る滿洲國民を救つて獨立させる爲に莫大な金と人の血とを捧げて居るのですが、イタリイは唯だ自分の利益の爲にエチオピアを奪つた丈でありませんか。此の様な利己的の考へで、世界の平和が維持されると思つて居る世界各國の如何に低劣であるか、思ひ半に過ぎるものがあります。然し悲しい哉我日本に於ても近頃大分上層階級に據る佛的傾向を帯びて來ましたが、本當の佛教を知らず、頭から佛

教を毛嫌ひして居るのは謂はなき事です。自我主張を破つて一死以て君國に報ずる佛教的意識を日本人が何うして今まで養つて來たか。それを知らないのです。私達はたとへしいたげられても、本當に日本を活かし世界を活かす、佛教の無我の信仰を以てお互に相ひ結び相ひ誓つて、本當の愛の燈を輝かしたものだと思つて居ます。

×

×

×

×

小説

死亡通知

角 田 寛 二

——風呂浴びて、冷たいビールをぐうつと——

山村君は道々その冷たいビールの感觸を舌の上に味つてゐた。日盛りの中にその大きな身體を持てあまして、額の汗を拭ふのもおつくり氣だつた。

「おい、風呂へ行つて来るよ」

敷居を股ぐともう大聲を立て、上りこむなり汚いものでも剥ぎ捨て、るやうに、背廣を浴衣に着かへると、細君が石鹼と手拭を差出しながら、

「浦田さんが、おなくなりになつたのよ。」

と云つた。

「えッ、浦田が、どうして……」

「黒わくの端書が來てゐるわ。」

細君が狀差しから端書を持つて來て見せた。成る程浦田浩一儀長

らく病氣のところ、藥石効なく七月十五日死去した。十六日午後三時自宅に於て告別式云々と云ふ普通の死亡通知である。

山村君はうーんとうなつた。石鹼と手拭を抛り出して、あくらかいて座り込んでしまつた。

「浦田さんて、貴君が何時かお話しなすつた方でしょ、同窓の方で仲が良かったが喧嘩なすつたつて。」

二三ヶ月前浦田からは是非逢ひ度いと云ふ手紙を貰つた時、そんなことを話したのを、細君はまだ覚えてゐた。然し細君は山村君と浦田君との關係をよく知らないから、またあのモーニングのしはをのばす面倒ぐらひにしか考へてゐなかつた。

だが山村君自身にはそうは行かなかつた。これは細君へは秘密である。然し浦田と云ふ名を聞く度に彼が内心何とも云へぬ憂鬱な氣分になる程、深い因縁があるのだ。

浦田が病氣をして可成り重いと云ふことは前から人づてに聞いてゐたが、死ぬだらうなぞとは思つてもゐなかつたから、かう突然死亡通知を受取つては腰を抜かす程呆然とするのは無理もなかつた。

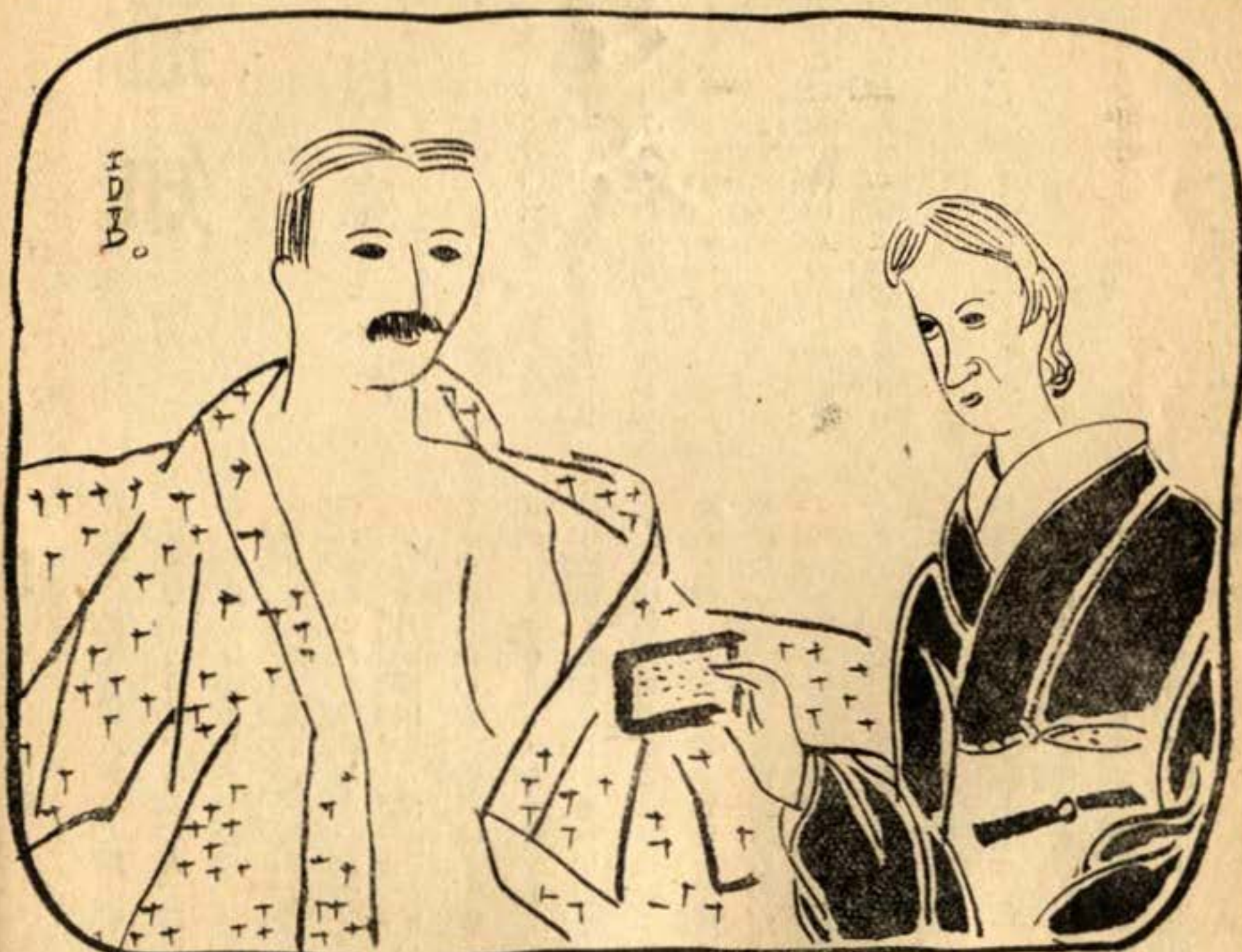
同時に心の何處かで「しまつた」と叫ぶものがあつたのを感じた。

普段はあまり物に動じそうもない山村君がどうしてその端書を持つて考へ込んでしまふ程複雑な氣持になつたかと云へば、山村君とこの死んだ浦田君の間には——山村君自身に云はせれば——とても和解の機會はありそうにもない經緯があつたからである。これは凡

て浦田の責任であると山村君は思ひ込んでゐる。

浦田夫人であるよし子さんは山村君の遠縁の親籍の娘である。

山村君が大學へ入るために上京した頃は彼女はまだ女學校に通つてゐた。東京にたつた一軒の親籍であつたのでちよい／＼尋ねる機會があつたが彼が遊びに行くと兄さん／＼といはれながら、豫習の手傳ひなどをしてやつたり、家族の者と一緒に遊びに行つたりしてゐる間に、何時かすつかり、よし子さんが氣に入つてしまつたのはお定まりの筋書通りである。そうなるに矢張り「感じ易い」青年であつた山村君はよし子さんの一びん一笑に心を躍らせるやうになつた。時には女學生氣分の彼女が、ふざけて肩に飛び付いたりするやうな時には、ポーツトして氣が遠



くなる。そして、夢はだん／＼甘く且つ深刻になつて来る。この夢を何時も現實と結び付けて、それを美化し且つ夢化したのは山村君だけであつた。山村君の様な緩い神経を持つた人にはあり勝の過失である。

そこへ浦田君が現はれた。浦田君とよし子さんが近付いた経緯は彼が山村君の親友だと云ふことを述べれば澤山である。浦田君は學生時分から切れ味のよい男だつたから、これと見込んたらずばりとやつて仕舞ふ。家の方も相當にやつてゐたから卒業前によし子さんの両親をくどき落し、彼女が又これに承諾したので、萬事OK卒業間もなく結婚と云ふ筋書通りに運んだのだが、狼狽したのは山村君だ。一家のよし子も、……と彼女の兩

親から浦田君との婚約を聞かされた時の彼の顔付は何とも云ひ様のない氣の毒なものだつた。と後でよし子さんの母親が浦田君に話したそうだが、實際山村君は一ヶ月ぼんやりして何も手が付かなかつた。だが、それ程激しい失戀ではあつたが、間貫一にもならなかつたし、三原山にも志願しなかつたは流石に法學士だけのことはあつた。が一方、よし子さんは本當は自分の方が好きだつたのだが周囲の者に強制されて、乙女心の弱氣で斷り切れなかつたのだと云ふ山村君一流の獨斷とうぬ惚れが、彼の轉落を支へたのだとも云へるのである。彼が絶望の最中に、浦田君に理由を書かぬ絶縁狀を送つた。浦田君は吃驚したが、直ぐにその理由を行間に讀み取つて、意外な感じと同時に哀れみを感じた。然し抜けがけの功名をやつた譯でもなく、自分の前ではいつも、よし子さんなぞは氣にも止めないやうな風をしてゐた山村が悪いのだと浦田君には浦田君の理屈があつた。だから相手の氣分が靜まる迄、待つてゐる方が良いだらう位に考へてゐた。

其後、山村君は浦田君と全く絶交したものと思ひ込んでゐた。道でひよつこり逢ふ様なことがあつてもそつぽを向いて行つてしまふから浦田君は取り付く島がなかつた。寂しく笑ふだけであつた。そういふ時山村君は、浦田といふ奴は惡黨で可憐な乙女をたぶらかした狐だ。あんな奴とは絶對につき合ふ必要はないのだと、自分に云ひ聞かせて、強て氣を強くしてゐた。

こんな具合に五年と云ふ月日がたつて仕舞つたのである。山村君の新陳代謝の鈍い神經にはよし子さんは相變らず可憐な乙女で野獸の鎖につながれ、自由な天地にあこがれてゐるお姫様のやうに思へてゐたのである。不幸なことに、全く不幸なことに、山村君はよし子さんにそれ以來一度も逢はなかつた。

山村君は暫く座込んで考へてゐる風であつたが端書を抛り出すと又手拭と石鹼を持つて立上つた。

「貴方、お通夜にお出にならなくても良いの？」

細君は、何時になく物思ひにふけつてゐる夫の様子を見て、たゞならぬ氣分を感じ取つた。

「お通夜？うむ、行かなくても良いんだ。」

かう云ひ捨て、山村君は出かけて仕舞つた。山村君は湯に浸りながらまた考へ込んだ。

お通夜に行つたものだらうか、行かないものであらうか。あんな奴、死んだつていゝんだ。然しよし子さんは、山村君はよし子さんのことを思ふと心がふくらんで來た。

山村君は急に何者かに後からせき立てられる様な氣持になつた。ろくに流しもせずにあわてゝ湯から上ると、また飛込むやうに家へ歸つて來た。

「おい、お通夜に行つて來るから着物を出して呉れ」妻君はあつけ

に取られてゐたが、山村君は妻君を喚なり付けながら、白地の上布を出させて、袴もはかずに着流しで、

「遅くなるから」

と云ひ捨て、飛出して仕舞つた。額からは汗が水をかぶつた様に流れてゐた。

山村君は浦田君の母堂の前にきちんとかしこまつて、何度も頭を下げてゐた。かう云ふ時は、きまりきつた文句なぞは云はず、口の中でもぐ／＼云ひながら、頭を下げてゐるのが一番だと誰かに教つた通りを忠實に實行してゐるのである。家の中は流石に出入の人達でなんとなくざわめいてゐたが、母堂は案外に落付いてゐて、山村君に笑顔さへ見せた。

「一昨日の晩方は大變元氣もよく、これならと安心して居りましたのですが、あなた……」

と死に到るまでの一通りの経過を話して、死ぬ前に一度、貴方にお目にかゝつておいて頂き度かつた、と云はれた時は思はず目をふせた。母堂も浦田君と山村君との關係をうす／＼は聞いておつたらしいのである。

「お線香を上げてやつて下さい。」

母堂は流石に涙聲になつて、山村君を隣の部屋に案内した。

二三人の親類の人らしいのにお辭儀をして死骸の枕元に座つた時

かたわらにゐた婦人が死骸の顔に掛けた白布を靜かに取り去つた。山村君が見たものは、鼻筋の通つた、口元の締つた、がつちりした顔を持つた「精悍」と云ふ感じさへしたあの浦田君の顔ではなく、骸骨の上に皮を置いたやうな一個の象牙細工の面であつた。山村君は死臭を顔の邊りに感じながら、も一度見直さなければならなかつた。だが、矢張りそこに黙つて横はつてゐるのは浦田君に違ひなかつた。山村君は急に胸にこみ上げて來るのを感じた。

あの最後に銀座ですれ違つた時の、當惑そうな浦田君の顔が、目の前にぼつかり浮んで來た。まぶたが熱くなつて、あはて、白布を元の通りに掛けると、逃れるやうに元の部屋に引返して來た。浦田……學生時代の彼との生活の斷片が生々しく目の前に描き出されて來た。何とも云へない懷しさをもつて。

「よく御出下さいました。」沈んだ若い女の聲に默想が破られた。

確か今の彼のために死者の白布を、とつて見せて呉れたあの婦人であつた。山村君はあわて、頭を下げてから婦人の顔を見た。始め見た様な顔であると思つた。目を眞赤に泣きはらして、美しい顔が疲労のために痛々しくやつれてゐた。それが「捕はれたお姫様」だと今の今迄思ひ込んでゐたよし子さんであつたのだ。普段着であり、銘仙のじみな柄の着物をきちんと着て、つゝましく挨拶をしてゐるこの立派な奥さんの、白い額には二三本の髪の毛が痛々しく亂れてゐた。

「やあ、どうも御無沙汰しました。この度は」

山村君は自分でも意外だ、思ふ程落付いた挨拶が出来た。

「急にかう變が来やうとは思ひませんものでしたから……」

涙であとの言葉が出なくなつて、奥さんは唇を噛んだ。

「浦田も一度お兄さんにお目にかゝりたいと申しておりましたのに。……急にかう云ふことになりました……」

山村君はハツとした。確かに背中を丸太ん棒でどやされた時の氣持であつた。

——一度お目にかゝりたい、——お兄さん——唇をかんでこらへてはゐるが、愛する者の死と共に死んで行かうとする己れの魂に、からくも縋り付いてゐるやうな、——生ける屍のやうな彼女——。

山村君の夢と現實とが一時に崩れ出した。この一瞬は確かに嵐の一瞬であつた。この目の前に現はれた事實は自分に對して何んとか苛酷な批判を下したものだらう。世界は忽ちに覆つた、いや夢がくつがへつたのだ。——然しその一瞬の嵐はたちまちに静つてあとに残つたものは清らかな現實感であつた。

「申譯ありません。」

よし子さんにでもなく、浦田君にでもなく、自分自身にでもなく目に見えぬ第三者に云ふやうに、山村君はきつぱりとそう云つた。

山村君が家へ歸つて來たのは明方であつた。葬儀の準備、來訪者への挨拶、等々に先に立つて働きながら、山村君は少しも疲れた風が見えなかつた。

「どうだつて？」

とねむそふな聲で聞いた。

「やつぱり行つて良かつたよー」

山村君はそう云つて、床に入つた儘何時までも眠らなかつた。

(をほり)

味の覺法の悦境



ヨードの素は

天然に多量のヨードを含み
有害なノリ分がなく湯水に
よく溶けます

用ひ方

肥り過ぎ、高血壓、お産前後
の奥様方、顔色の良くない
方、風を引き易いお方

進呈

大日本水産工業株式會社



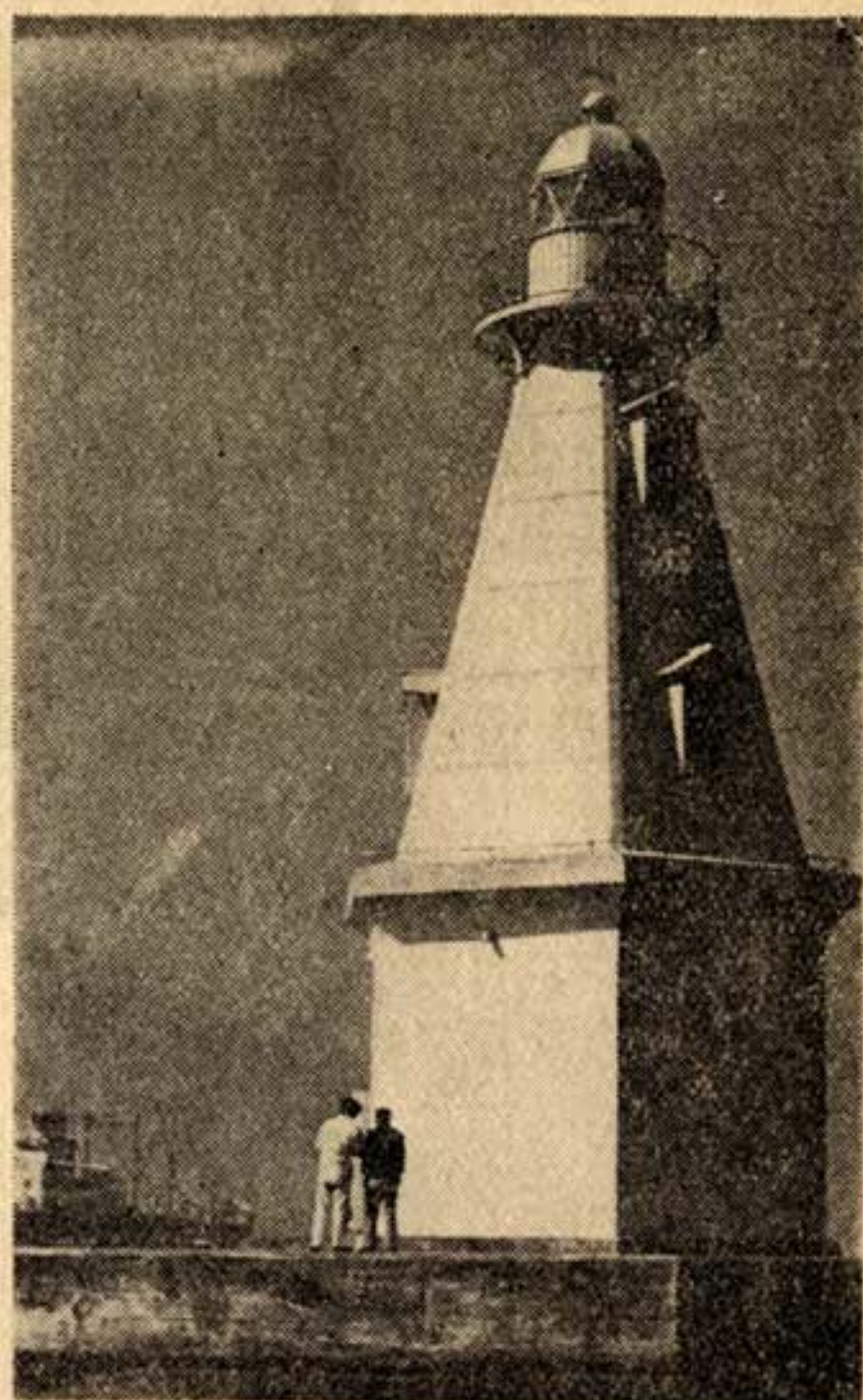
卓效藥

ヌレインハ

血液を清淨にし骨格と神經を
強化する強力ヨード有機性劑

効能

動脈硬化、中風、腺病、授乳
婦ノ燐カルシウム不足



夫二不藤安

臺燈白

かてい
いがく

肋膜炎後を どうするか？

醫學博士

小池 重

肋膜炎といふ病氣は世間に澤山ある。子供にもあれば大人にもある、婦人にもあれば男子にもある、學生にもあれば軍人にもある、商人にもあ

ば農夫にもある。さういふ風になかく多い病氣である。

また病氣の發生する季節のうへから云ふも、體

夏の景物と川柳

。。。代田 重雄

浴衣

一日の汗をサラリと入浴で流して、浴後に着る浴衣の肌ざわりは、夏の唯一の快味だ。極楽浄土だ。ゆかたは湯帷子の略稱で、浴後からだに纏ふて湯氣を拭ひ取るからの名だそうだ。昔は木綿にきまつてゐた。そして今日のやうに浴衣で外出するやうな事は無く、殊に娘などはそれを取としてゐた。浴衣が平氣で市井に飛び出するやうになつてから、今日では種々な模様をあしらつた贅澤な物が出る。来るやうになつた。時代の進歩と、人間の贅澤には際限が無い。昔の人達に見せてやりたいものだ。

くら闇の浴衣後妻はゾツとする

(柳樽)

格のうへから云ふも、一定せる時季もなく、また一定せる體格もない。何時でも起り、誰れにも發し得る疾病である。そんなら之にかからぬ工夫手段はないかといふに、さうでもない。

健康と思はるゝ人が肋膜炎を發するのは、之を發すべき原因的動機がある。故にこの動機を作らぬやうにするか、動機の前に充分警戒するのが肝要である。體格偉大にして、平素極めて健康なるため、病氣などにかかりさうもない人が、肋膜炎にかゝることもある。貧弱矮小なる體軀なるにも拘らず、遂に肋膜炎を知らずして老境に入る人もある。

然らば其の肋膜炎發生の原因的動機といふは何かといふに、過勞感冒外傷打撲其他である。過勞は何病にも原因的動機となる、感冒も亦同様の場合が多い、従つて過勞せる心身を以て感冒にかゝるか、又は感冒にかゝれる身體を以て無理押しに過勞に陥るか、又はさうした際に更に胸部に打撲をうけるか、外傷を蒙る事があれば、必ずとは申さぬが、肋膜炎を起し易いことになる。それゆゑに此點に注意すべきである。かく注意しても猶ほ

一家族中數人あとから／＼肋膜炎にかゝれる例もある。これは體格よりはムシロ體質に關係がある。結核とか、ロイマチスとか、其他細菌性傳染とかに原因するものと思はれる。

病中とか、手術後とか、産後とかに續發する肋膜炎も亦尠くない。急性肺炎の時には、同時に肋膜炎を起し、其のために激甚なる胸痛を訴ふることがある。

肋膜炎には、最初から肋膜炎として發生するものと、他の病氣療養中に續いて發生するものとある。又乾性といふて胸腔内に液體の溜らぬものと濕性といふて液體の溜るものとある。何れにしても、適當なる治療法をなせば、良く治癒するものである。唯だ其の適當なる治療といふことが問題である。

適當なる治療

とは何か、適當なる養生法とは何か。發病當時に(一)熱候のある間は、何人も良く醫師の言を守りて養生する、(二)胸痛のある間は、誰れも皆安靜を守りて就寢する、(三)胸内に苦悶ある間は、家人や

この川柳も夏だけに怪談めいて物凄。

團扇

團扇と書いてうちとは讀ませる、名義は打羽の義、即ち蚊とか蠅などの襲來を打ち拂ふからうちとは言つたものだ。團形だから、強いて團扇と綴つたところは面白。産地は東京、京都、大阪、奈良、愛知、岐阜等。奈良は昔から團扇の産地で、春日の社人が社務のかたはら作つたやうな事が古記に見えてゐる。團扇が一般に、盛んに利用されるやうになつたのは、やはり徳川時代に入つてからである。岐阜産の岐阜團扇は、地方色が濃く一寸めづらしい。奈良團扇は、古く役者の似顔やせりふなどを書いたものだが、今日の物は知らぬ。昔は初夏になると「本盞團扇、更紗うちは、奈良團扇」といふ團扇賣りの聲が、多く

看護婦の言ふまゝに、服薬もする、注射もする、絶対安静もよく守る。

さてしかし三四週間を経て、熱も下降し、輕快となり、何等の苦痛を自分に覚えぬやうになると、兎角養生に怠り勝ちとなり、無理を通すことになる。一日も早く出勤し、執務したがるのである。それが素人である。輕快といふは全快といふことではない。

全快といふても新らしきあり、舊きあり、完全もあれば不完全もある、充分もあれば不充分もある、そこに時の問題も關係して一樣でない。例へば壁にしても、コンクリートにしても全部出来上つたといふものゝ、時間を経過せざれば、手を觸れられず、物を置く譯にもゆかぬやうなものである。コンクリートの如き歳月を経るに従つて堅牢となる。肋膜炎のあと、それによく似て半歳とか一兩年とかを経過せざれば充分には全治せぬ。二三年経過しても、體質の關係上、まだ充分ならぬものが多い。それに此間に於て感冒にかゝるとか、不衛生するとか、過勞するとかいふ事があれば、それだけ充分なる全治に手間どることになる。

否手間取るといふよりは、再發する、或は多少惡化する、或は直ぐ、お隣りの肺組織に炎衝が蔓延することになり勝ちである。これが將來結核の導火線ともなるので醫師から警戒せられるのである。注意せよといふのは此の爲めである。

後療法として大切なことは、自覺のことよりも、他覺的（醫師の診察）變化の有無に重きをおき、攝生の必要ありや、なしやを定むべきである、しかし診察しても著變が發見せられぬのに、疲勞するとか、羸瘦するとか、時々體温が上昇するとか、胸内に壓迫を感じるとかいふ場合には、決して油斷してはならぬ。何よりも先づ休養である。

休養のうちに精神的と肉體的とある、此兩方が共に行れるやうにせねばならぬ。折角轉地して肉體に休養は出来ても、精神上に不安があつては無益となる。また精神には快活を感じても、そのため肉體的に運動が過ぎては有害となる。夏期を利用して、山間なり海岸なりへ轉地し靜養するとは、適當たる後療法の一つである。

初夏をいろどる行商の呼聲の中に聞かれた「蜘蛛の糸巻」といふ本には、錦繪の團扇を賣つた事が見えてゐる。今日東京で作られる團扇は實用向きといふより、その時代の趣味に投じて、やはり愛玩品として眺めたい物の方が多い。その團扇も、川柳に見ると、

綱張て追打ちにする憎い口

（文化）

團扇ではにくらしいほどたゝかれず（寶曆）

と、夏の艶な點景になる事は昔も今も變りがない。しかし團扇も、勝手元の貧乏神のよるこぶ蓋團扇と來ては、逃げ出したくなる。

金魚賣これかこれかと追かけるじつとして居なと額の蚊を殺しうたゝねの團扇次第に虫の息泊り客蚊帳の話の耳に入り。

天台聖蹟参拜の記

野口周善

東亞聖學苑主催の、天台山聖蹟参拝團に参加し、四月二十日神戸より乗船、同二十二日夕刻上海に上陸した。目的の天台山は、支那に於ける天台宗の發祥地であり、開祖智者大師の遺跡であるので、之れに参加の團員も、大森淺草寺貫主を初め同宗の僧侶が多く、一行十九名の中十六名であつた。出發以來海上も平穩で、さい先よしと祝し合つたが、上海に着いて見ると、豫ねて出願中であつた、護照の下附が不能と聞いて、一同驚愕した、中でも、天台の老僧達は、多年夢にまで見て、あこがれてゐた、祖蹟の参拜が、此所まで來て、能きぬとは残念であるとして、非

常に悲觀した様であつた。

不許可の理由と云ふのは、天台山は、福建の省境に近く、同省を追はれた共匪が逃込んで居り、殊に山中の住民は瘠地を耕し、貧困の生活をしてゐる關係上、兎角富者や外人に對して、反感を起し易いから、何かなる不穩の行動に出づるかも知れぬからと云ふのであつたが、その眞意は外にあるらしかつた。

それでも、大使館の事務官や、杭州領事の交渉、上海在留同胞の奔走に依り三日目の夕刻、護照を手にすることを得て、一同安堵した翌二十五日午前八時半、多數の僧俗同胞に送られ、勇躍して北停

車場を出發した。

一行二十三名（團員十九名の外に通譯二名案内を兼ねて参加した同胞二名）江南平野の春色を車中に眺め、正午杭州着、西湖其他同所の名勝舊跡を見物して、湖畔の旅亭に宿泊。

翌朝杭州市吏と巡警二名とに護られ、大バスで出發、詩文にて有名な錢塘江を渡り、紹興新昌等を経て、百七十哩を突破し夕刻細雨に煙むる天台縣城に着、約二哩をへだてる天台山麓の國清寺に入り宿泊。

抑も天台とは諸山の總稱であつて、主山主峯と曰ふものはない。

名稱の起りは、頂が天の三辰に對し、牛女の分野に當り、上台宿に應ずると曰ふ所から始まつてゐる。

國清寺は開宗最初の道場に

て、山中第一の巨刹なり、諸堂は近代の復興なりと雖も、寺前には隨代の建設にかゝる、高さ百四十尺九級の大塔聳え、莊觀を呈してゐる、昭和十年一月始めて此の塔を開きたるに、三級目から、隨代に石に彫した、導師、文殊、普賢、觀音、勢至、藥王密勸の七尊像を發見し、佛教美術研究上得難き資料を得た（記者其の拓本を持來る）

寺の門前で二の溪流が合流し、五の峯がその後、に聳え、智者大師を安置せる開經堂、僧堂の選佛場。三聖殿、大雄寶殿、方丈、等七堂伽藍を備へ、十六羅漢、五百羅漢、寒山、拾得、豐干、三賢の像、清版大藏經等を藏し、聯や碑碣其數を知らず、住持可興和尚、會下の雲水百餘名、此所のみは今尚ほ天台の觀行を捨てず、晝夜梵貝誦經の聲を聞く。（續く）

法語 新釋 あ ふ ひ 草

亂みだ ろゝこゝる

中 村 辨 康

○
私はやりかけたら、或る程度までやり通さなくては、氣のすまぬ性分だつたので、家の者の氣兼ねなぞ頓着せず、其翌日は朝から家を飛び出して師を訪問しやうとしたが、あいにく親類から使が来て、のつびきならぬ用事で四五日暇を費さねばならない事になり、心ならずも其用事が片付くまで、師を訪ねることが出来なかつた。

ところが、師も何處かへ御旅行になり、一二ヶ月程お留守になると云ふので、私も一日千秋の思ひで、師のお歸りを待つたものの、仕事の方は手につかず、仕方なしに宗教の圖書をひねくり廻して、色々讀んでは見たが、判らない箇所もかなり有り、びつたり來ない點もあるので、何うしても師に再び御遇ひしてお話を承るより外に、手はないと思ひ込むやうになつて來たのだつた。

今から思へば、是も如來の御接理であり、因縁の順熟が用意されつゝあつたのかも知れない。

さうかうして居る間に、何時しか夏になつてしまつた。私は時々師の家を訪づれるけれども、留守居の人が淋しく獨りで居るだけで、師の影は一向に見えない。

「何うしたのだらう。」
と心配して居ると、或日の夕方、ヒョッコリ師が私の家を訪ねて下すつた

のである。

私は恰度なくなつた父にでも遇つたやうなつかしさと嬉しさとを感じて、早速奥の一間に請じ入れ、色々おもてなしをしようとした。

然し師は手を振つてこれを止められ、

「何時やらお約束した御話しをさせう。私も或る問題の事で暫く郷里に行つて居ましたが、あなたへの約束を果さないのが氣がゝりでしたから、まだ問題は片づきませんけれども、一寸閑を見て歸つて來たのです。」

これはあなたの折角の萌出し初めた求道の氣組を挫折させては、誠に相濟まぬと思つたからです。

御参考になるならぬは兎に角として早速お話し致しませう。

私の母は非常に熱心な念佛信者だつたので、父に早く死に別れた私は母の手で宗教的な氣持を多分に養はれたのでした。

無論母の信仰は極めて單純なもので、理窟も何もなかつたのですから、色々母から聞かされる話を、其まゝ鵜呑みにされる譯のものでもないのですが、其處はやはり親子の情愛とでも申しませうか、子供ごゝろにも、神佛と云ふ靈的存在は

あるものであり、且つ神様は現在を守つて下さり佛様は未來を護つて下さるものと云ふ位の極幼稚な宗教感情で、御宮の前や御寺の本尊様の前では拜禮もし且つ其加護を祈つたものでした。

然し段々學校で科學の洗禮を受けますと、スツカリ佛様の存在が信じられなくなり、宗教など云ふものは畢竟愚夫愚婦の爲めのものか、現實の不滿を糊塗しやうとする弱い人間のデツチ上げたものだらうぐらゐに、輕く片づけて見向いて見る氣もしなくなり、モウ享樂一點張りの人生觀で、随分荒んだ生活に這入つて仕舞つたのでした。

多少父の残して行つて呉れた土地などがありましたので、食ふには困らなかつたのですが、人間と云ふものは妙なもので「歡樂極まつて哀愁起る」と申しますが、不圖した事から人生の愁しさを感じ出し、非常に現實の人間生活があきたらなくなりました。それには色々動機もあるにはありましたがそれは今更ら申上げますまい。然しそれが爲め一種の虛無思想に陥つて仕舞つたのですが、それがまたとても堪へられなくせつなかつたのです。幾度か死を決するまでに追ひつめられて、時々家を飛び出しさ迷ひあるきました。が、いつも心の引かれて今一步と云ふところで、にぶつてしまふのは

「たつた一人のお母様になげきを掛けては濟まない」
と云ふ聲だつたのです。六つと云ふ子供の時、父に別れ、親一人子一人の手鹽にかけられた母のなげきを想像すると、何うしても死ねなかつたのです。と云つて思想的には居ても立つても居られません。生き甲斐のと云ふものを全く見失つて仕舞つたのでした。

さうかうして唯だ一日一日に引連られて年を重ねて行きましたが、何とかして此の愁しい心を安らかにしたいと思つて、色々な宗教書をむさぼり讀んだのも其頃でした。トマス・ア・ケンピスや、トルストイのものや、日本物では中江篤介、綱島梁川、眞宗の信仰に追ひつめられて自殺した野村隈畔などの著書などから、古いものでは各宗の祖師方の遺文たとへば道元の正法眼藏、日蓮の遺文録、親鸞の教行信證、歎異鈔、恵信の往生要集など、其他西洋の哲學もの、日本の佛教學者の手になつた原始佛教關係のものなど、何の系統もなく、手當り次第に讀んで見ましたが、思想と信仰とは違ふと見えて、私の淋しさを癒し得るものに出遇ひませんでした。

一方には基督教の教會や各宗の説教講演など聞き歩きましなもの、今一息と云ふところが判らず、丸で宗教ルンペンか宗教ごろつきのやうにうろつき廻るだけで、これと云つて

心に深く喰ひ入るものもありません。

でも段々宗教的にな氣持近づいて行つたのでせう。やる瀬なく道を求める氣持は深められたのでした。

或時偶然或るところで、別れてから十年以上もお互ひに御無沙汰し合つて居た友人にヒョツクリ出會ひました。

以前から宗教的な男であつたが、其風體を見ると、髪を長髪に結んで髻をボウボウとはやし、丸で昔の劍術使ひのやうななりをして居ました。餘り不思議だつたので

「何うして居るんだ」

と尋ねますと、

「實は俺もすつかり變つたよ。三年程前から念佛信者になつてゐるんだ。其時發心して一生剃刀を使はない事に決めたんで、髭ものびるし頭の毛ものびて、いさゝか仙人じみたなりになつたが、實はツイ昨日まで山の中で修行して居たんだ。唯念行者の遺蹟でね。ソバ粉と水で三月程暮したが、此通りピンピンして元氣はちつとも衰へないよ。何ね。信仰も結局口舌では駄目なんだ。實際に證據をにぎらなくてはいかんと思つて山を入つたんだ。入つて見ると驚いたね。直ぐ里心が付いて山を下りたくなる。一週間目位には里へおりてパンを買つたり紙を買つたり、無理に用をこしらへては、理由のない

理由にして、山を出たり入つたりしたが、是ではならぬと氣がついて、二ヶ月程はほんとの仙人生活をしたよ。漸く豫定の三月が終つたので昨日山を出て來たんだがね。やつぱり理窟ぢや駄目だね。今度本當に色々教へられるところがあつたよ。所で君は近頃どうして居る。宗教順禮では駄目だよ。一つ念佛して見ないか。何も山にはいる必要はない。何處だつていいんだ。近所のお寺に行つたつて夜

以前から宗教的な男であつたが、その風體を見ると……



るまいが、何んなにお金があり餘る程の家庭でも随分子供に對する苦勞は絶えはしないのだ。身體が弱いとか、學校の出來が悪いとか、たまたま出來がよければ左りへ走るとか、或は親の職業を嫌つた擧句の果には道樂を覺えて身を持ちくづすとか、自分丈は何うやら一人前の世渡りが出来るにしても、子や孫の代になつて何んな事で失墜しないにも限らないのが

人間社會なのだ。然かも親の感化と云ふものは、かなり根深いものだから、親が人格的でなければ、其子も名や金以外に何も知らない人間になるか、或は親への反逆者になるかの二途を出ない筈なんだ。君にこんな御説教を云ふのは嫌だし、信仰の利益と云ふ實利的

初で、模倣時代を通過しない限り、自分のものは出て來ない。信仰にしたつて夫なんで、模倣念佛で結構だからやつて貰ひたいと思ふよ。人間の魂の問題が解決しない限り、名譽だつて金だつて糞の役にも立ちはない。何の反省もなく一生を名だ金だと騒ぎ廻つたところで、サテそれで何うなる。それだけではないか。それでおしまいではないか。君は妻子がないから、父たり母たる者の苦しみは知

な意味を強調するのも嫌だが、全く世間の人達の、口ではゑらさうな事を云つて、一ぱし高等批判のつもりで居るが、自己反省のない無批判なお高く止まつて居る態度が、むしろ氣の毒に思はれてならぬから、ツイこんなこともたまには云つて見たくなるのだ。君も宗教は嫌ひの方ではなさうだが、頭ではばかり批判して居たのでは何にもならまい。恐らくまだ確

信に到達して居ないだらう。こんな事をして居る内に直ぐ老爺さんになつてしもふぜ。悪い事は云はない。念佛して見ろよ。古來から念佛の確信によつて力強い人生を踏みしめた人はいくらもある。彈誓、徳本、關通、稱念、以八、唯念、近くには俺れを導いて呉れた辨榮師など、随分強い信仰を持つて居た人たちだ。其人達の言葉は平凡ではあるが、非常に深い信仰體驗からほとぼしつて居るのだ。今時の生意氣な頭でかつちで、足元のふらついてゐる人間から見たら、形なしにこきおろされるかも知れないやうな極く平凡なことを云つて居るやううではあるが、其人達の生活事實を見ると頭をさげざるを得ないのだ。僕は法然上人の言葉ではないが、愚痴に選つた氣持で、今度三ヶ月の山籠りしたのだが、それは信仰學校へ入つたのに過ぎないもので、何も昔風の隠遁をした譯ではない。君もモウルンベンは止めて學校に入つたつもりで念佛して見ないか。くどいやうだが、衷心からおすゝめするよ」

と、友情あふるゝばかり、熱心にすゝめて呉れるのでした。私も實は思想的には暗黒の世界に行詰つて居た時であり、且つ其熱心な友情にもうごかされて、思ひ切つて念佛して見る氣になりました。始めは何だか體裁が悪くていけませんで

したが、段々やつて居る内に聲が出るやうになり、二三十分の辛棒しか出来なかつたのが、一時間位續け得るやうになり、何と云ふ事なしに興味が持てるやうになつて來ました。然し法然上人の歌に

われは唯だほとけにいつかあふひ草こゝろのつまにかけぬ日ぞなき
(法語抄 二六〇)

と云ふのがありますが、中々そんな具合には行きません。附焼刃のやうなものなんですから忘れ勝なんです。そこでせめては南無阿彌陀佛と云ふ聲の通りの心になりたいと思つて、南無は自分の願ひであり、阿彌陀佛は拜む對象であるから、南無、阿彌陀佛と二つに切つて其聲の通りに心を働かせて行けばよいと云ふ考へから、工夫と云ふと變ですが、やつて見たのですが、謂ゆるやつて見ると云ふ言葉の通り、試しなんですから、要するに自力的なもので、形は念佛ですが、本當には念佛でも何でもありませんでした。初めからしまいまで雜念だらけです。で、どうかして此の雜念のない一念を通したいと、色々に苦心して見るが、中々問屋が容易くおろして呉れません。

法然上人時代にも之が問題になつて居たと見えて、
明通問ひ奉りての給く、末代惡世のわれらがやうなる罪濁の凡夫、



如何にしてか生死をはなれ候べき。上人答へての給はく、南無阿陀
佛と申して極樂を期するばかりこそしえつべき事と存じて候へ。
僧都の云く、それは形の様にさ候べきかと存じて候。それにとり
て決定をせん料に申つるに候。それに念佛は申し候へ共、心のちる
をば如何に候べき。上人答へて曰く、それは源空も力及び候はず。
僧都の云く、さてそれをば如何し候べき。上人の曰く、ちれども
名を稱すれば、佛の願力に乗じて、往生すべしとこそ意えて候へ。
たゞ詮ずるところ、おほらかに念佛を申候が第一の事にて候なり(同
抄一三八)上人、僧都退出の後、當座の聖達に語りての給く、欲界
散地に生れたる者はみな散心あり、例へば人界の生を受けたる物の
目鼻のあるが如し。散心をすて、往生せんと曰はん事、其理しる
口さきてはゑらそうな事を云つて一つはし高等批判のつも
りて

べからず、散心乍ら念佛申すものが往生すればこそ、めてたき本願にてはあれ云云(同

抄二二九

と云ふ話があり、これに似た外の話もあります。信仰の三
階段即ち求信時代、入信時代、入信以後の修造時代の三時代
を通じて、念佛の中に起る雑念妄念は無くなるものではあり
ませんが、わけても求信時代はむしろ終始一貫雑念であつて、
心の中は念佛になつて居りません。と云ふのは昔しは阿彌陀
佛の存在に就ては一般に誰も疑ふものはなかつたのですか
ら、其信じられて居た阿彌陀佛に南無する事は、初めから出
來て居たのです。だから唯だ心が散る散らない事情が問題に
なつて居てよかつたのが、今では阿彌陀佛の存在が疑はれて
居りますので、テンで念佛になつて居ないのです。随て雑
念が交るも交らないもあつたものではなく、頭から雑念なの
です。それですから一念を通さうとする時、それは念佛では
なく、口でこそ南無阿彌陀佛と云つて居るものの、他力的な
南無のところは毛すぢ程もなく、自力的な禪定の一方法とし
て念佛が用ゐられてゐるに過ぎないのですから、他力的信仰
の念佛とは似て非なる念佛しか出来ないのは當り前のことな
のです。

よく「念佛して見たが何の變哲もなかつたからやめた」と
云ふ人がありますが、何の變哲もないのは當然なことで敢て

異とするに足りません。

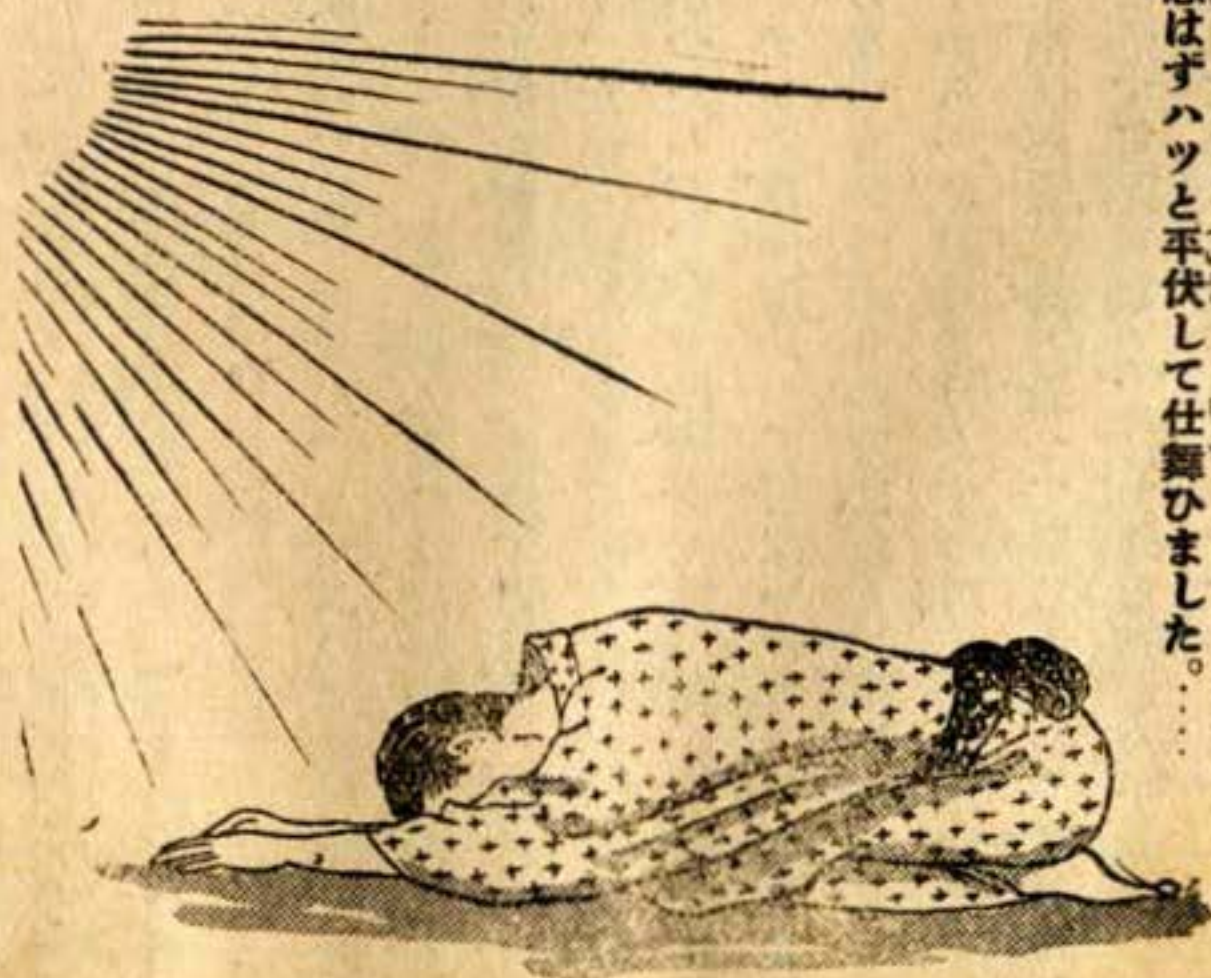
でも私は外に方法ありませんから、毎日一時間位は續けて居たのでした。

すると或る朝不思議の現象が起つたのです。眼の先がボンヤリ霧がかゝつて居るやうになつてハッキリ向ふが見えません。眼が何うかなつたのか知らと思ひ乍ら頻りに念佛して居ました。無論色んな事がそれからそれへと浮んで雜念だらけですが、何分眼の先の霧が氣にかゝつて「何うしたのだらう。眼醫者にでも行つて見やうか知ら」などと思ひ續け乍ら、念佛して尾りますと、障子の破れから旭がさして來て佛壇の中に丸い影がボカツと浮んで寫つてゐるのに氣が付きしました。ハテナと思ひ乍ら何の心もなく、それを見て居ると、それが大きくなつたり小さくなつたりします。眼の調子だつたのでせう。全く變なのです。あれが大きく開いて謂ゆる光明赫耀と云ふやうな事になつたら面白からうと思つて居ると、パツと一邊に其ブカブカして居る光が廣がつて、天地全體一色になつて仕舞つたのでした。幼稚な事を云ふと笑つてはいけませんよ。何しろ頭のテツペンから足のつま先までビリビリつとしびれて仕舞つたのですから、驚いたの驚かないのつて、思はずハツと平伏して仕舞ました。自己催眠にかゝつたの

です。然し初めての事でしたから何と云ふことなしに涙がハラハラツとこぼれて、不思議な經驗に泣いてしまつたのでした。

だが、考へて見ると實に馬鹿馬鹿しいのです。「何だ。つまらない。こんな些細な精神現象に驚くなんて俺も何うかして居るわい」と、自分をたしめて見ましたが、妙なものでしてそれからと云ふものは、念佛が病み

つきになり、それまでは朝一回丈だつたのを朝晩二回宛やることになつて、何と云ふことなしに阿彌陀佛が感じられる氣



がするのです。眼を開いて居ると普通ですが、眼をつむると天地に一杯に廣がつて居る何物かが感じられます。形はないが天地全體を包んで居る力が感じられてるのです。然したつた一邊の經驗ではよく判りませんし、人に話すことも出来ませんので、何度も何度も經驗して横からも堅からも精細に眺めて見てハッキリした理論的證據をも得たいと思つて、それから色々やつて見ますが何うしても二度目の現象が起りません。そこで近所の御寺に頼んで三日三晩ぶつづけに夜もねないでやつて見ました。然し結果は失敗だつたのです。眠りが足りないものですから四日目の朝になるとまるで腑抜けのやうになつて、しかもスツカリ念佛が馬鹿らしく嫌やになつて仕舞つたのです。コイツはいかんと思つて、例の友達の仙人のところへ飛んで行つたのです。よしそれでは一週間程君と一處に山へ行つて見やう、長野縣に彈誓上人と云ふ人の遺跡の地がある。窟があつて其處に小さな堂もあり寺もあり、食物には困らないから其山に行かう」と云ふので、一週間其人と一處に山籠りしました。すると何うやら一旦嫌やになつた念佛に熱が出て來て、朝から晩まで、六時間程の睡眠と三度の食事の外は休まず、明けても暮れても念佛三昧で、一生懸命にやつて居ると、何うです。ちよつとも雜念が起らないではありませんか。不思議に思つて其友達に尋ねると

「それはまだ駄目だよ。それは唯だ心の言葉が繰り返へされて居る丈で、本當の念佛三昧ではない。如來の大慈悲がシミジミ味はれて來ない限り信仰とは云へない。君にはまだ自力根性が抜けて居ないのだから、其自力根性を据て切らねばいけない。君が君の力で、君の稱へる念佛で信仰を獲得しやうと思ふのなら大間違だ」と云ふのです。さあ判りません。さつぱり判らないのです。ボンヤリ考へて居ると、「徳本上人にも秘密用心と云ふものがあつて兎もすれば自力根性が起きたり雜念が起つたりしたのを用心したと云ふことだし、善導大師の般若讚と云ふのには念佛即道無三功夫。如此人難ニ化度」とも云つて居る。功夫とは餘念のない念佛三昧の事だが、もつとよく考へ直して本當の念佛になり切らねばいけない。坐禪の方でも工夫と云ふ事をやかましく云つて居る。無論禪宗流の工夫と念佛の工夫とは全然性質が違ふが、自我に死ぬところは一つだ。マアそこを一つ折角工夫し玉へ、」と云ふ。よしそれでは一つに氣永に修養しやう。さう思つたものですから、一週間過ぎると、其友達に別れて歸郷し、毎日毎日其功夫に取りかゝつたのでした。ですが、法然上人の云はれた通り、人間から雜念妄念を取り去るのは出來ない相談だつたのです。

編輯後記

◇「叱られたことも戀しき魂まつり」うら盆となつて、俄然この酷暑 毎年のことながら、暑い暑いとぼやくのが凡愚の常、編輯室も凡愚揃ひと見へて、暑さをかこち、うなり聲は到る處から上つてゐる。然し暑さにまけて、雑誌の品をおとしたとあつては讀者諸賢に申譯ないばかりか、第一祖師上

人に申譯がたゝないと頑張り抜いて、にぎやかな、且つ涼味あふる八月號を讀者に提供し得た。矢張りこれも念佛主義のがんばりのおかげである。

◇巻頭を飾つた「本當に求むべき宗教」は法然上人の後裔、立石鉉一氏、同氏の經歷と信仰に就いては既に新聞紙上に公けにされ、且つ「法然鑽仰」紙上にも屢々報道せられたから、讀者もよく

御存知のこと、思ふ。

◇法然の直流と我れらが鑽仰會とのかやうな因縁深き結合は、鑽仰會の前途のみならず、宗門並びに日本宗教の前途に、一つの輝かしい暗示を與へるものと、實に喜びに耐へないのである。

◇今月も佐藤春夫氏が多大の援助を與へられ、前月にも増して面白くためになる童話をよせられました。『ガンバリガンチャン』も今月からまた續けて諸君の御氣嫌をうかゞひます。

◇「廿九年の大精進」は本號の特種、信仰實話としては、この規模の大きさ、信念の深さに於て必ず讀者を啓發せしむるものがあると思ひます。

◇今月は新人の原稿を多く採用しました。本誌に一人新しい精氣を導き入れるためであります。

中村 辨康著 (四六版七二頁總ルビ付)

講話 一枚起請文

最も權威ある布教用書!

かつて本誌に連載し各方面の絶讃を拍したるのみならず、幾多の入信實話を生み出した信仰案内書としては折紙つきのもの! うら盆布教用書として多部數の申込全國より殺到す。從來の施本に代ふるにこの高級なる布教用紙を以つてする時はこの効果數倍數十倍である。

十部以上の申込に限り

一部當り 九錢 送料不用

淨土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十二年七月二十日印刷納本
昭和十二年八月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人
印刷人 赤尾 光雄
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人法語抄

藤井 實應 編

菊半裁版 一四四頁

クロース装函入

定價 卅四錢
送料共

信仰の珠玉！ 浩翰なる上人遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！
現代日本人の聖典！

手頃なポケット型、装訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手軽に取出して讀める。心靜かなる時、惱める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を経てなつたもの。配列にも、編輯にも新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！

勤め人も商人も労働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

再 版 出 來 !!

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

るすくよつをだらか 大木五臟圖

夏に
備へよ！

大木五臟圖は病弱體を根本から
立直すべく三百年一日の如く開病
に關し、東洋本然の漢法醫學を以
つて歴史を保持す



大木五臟圖の成果は歴史と共に、
益々好評を博し、近代醫學に伍し
燦然として輝いてゐる。

五十一
開開開開錢



元 賣 發
町路談販大・田神京東
社會名合木大

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十一年七月廿日印刷納本
昭和十一年八月一日發行

淨 土 第二卷 第八號

定價金十錢(送料一錢)